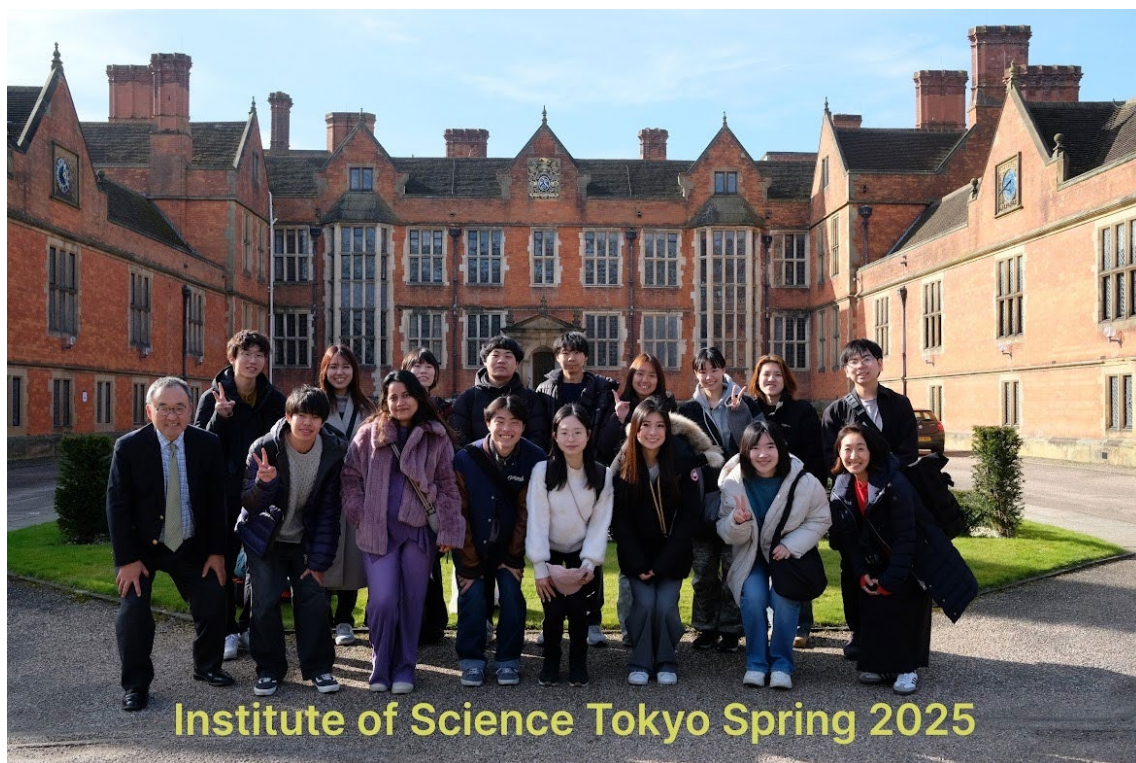


2025

UK 超短期海外派遣プログラム

報告書



目次

1.海外派遣プログラムの目的（渡航マニュアルより引用）	4
2.参加学生の紹介と研修日程	4
2-1. 参加学生の紹介	4
2-2. 派遣プログラム日程	5
3.事前学習	6
3-1.連合王国の紋章	6
3-2.UK での生活	7
3-2-1.ロンドンの地下鉄	7
3-2-2.イギリスの朝食	8
3-3.ヨーク大学生との交流	8
4. UK 概要	9
4-1. UK の基礎情報	9
4-1-1. 基礎情報	9
4-1-2. UK の産業	9
4-1-3. UK の地理	9
4-1-4. UK の議会	10
4-2.UK の歴史	11
4-2-1. マグナ・カルタの制定	11
4-2-2. EU 離脱	11
4-3. UK の人物	12
4-3-1. ウィリアム・トムソン（William Thomson）	12
4-3-2. ウィンストン・チャーチル（Winston Churchill）	13
5. ロンドンの概要	14
5-1. ロンドンの基礎情報	14
5-2. 歴史	16
5-3. 人物	17
6. ヨークの概要	19
6-1. ヨークに関する情報	19
6-1-1. ヨークの基本情報	19
6-1-2. 地理	19
6-1-3. 主要産業	20
6-2. ヨークの歴史	21
6-2-1. ローマ時代	21
6-2-2. ヴァイキング時代	21
6-2-3. 中世	22

6-2-4. 近現代	22
6-3. 施設紹介.....	23
6-3-1. ヨーク・ミンスターについて.....	23
6-3-2. 国立鉄道博物館.....	24
7. 訪問先の詳細	26
7-1. 国立物理学研究所について	26
7-1-1. 組織概要	26
7-1-2. 講義の内容.....	26
7-1-3. 研究室訪問.....	28
7-1-4. 研究発表	28
7-2. インペリアル・カレッジ・ロンドンについて.....	29
7-2-1. 大学概要	29
7-2-2. 講義、訪問時プログラムの概要	29
7-2-3. 研究室訪問.....	30
7-2-4. 学生交流	30
7-3. ロンドン大学クィーンメアリー校について.....	31
7-3-1. 大学概要	31
7-3-2. 講義概要	31
7-3-3. 研究室訪問	32
7-3-4. 学生生活	33
7-4. ヨーク大学について	34
7-4-1. 大学概要	34
7-4-2. 講義概要	35
7-4-3. 研究室訪問	36
7-4-4. 学生交流	36
7-4-5. 学生寮の生活について	37
7-5. 英国日産自動車製造について.....	38
7-5-1. 会社概要	38
7-5-2. 講義等概要.....	39
7-5-3. 工場見学概要	40
7-5-4. その他	40
8. グループ調査.....	41
8-1. ミュージカル	41
8-1-1. ロンドンのミュージカル.....	41
8-1-2. Les Misérables(レ・ミゼラブル)	42

8-2. 東京とロンドンの街の比較(グループ2の調査)	43
8-2-1. スーパーマーケット	43
8-2-2. 公園	45
8-2-3. マーケット	46
8-3. イギリスを舞台にした作品と町の関係	48
8-3-1. 名探偵コナンとロンドン	48
8-3-2. ハリーポッターとイギリス	49
9. その他	51
9-1. 食事	51
9-1-1. 朝食	51
9-1-2. フィッシュアンドチップス	51
9-1-3. サンデーロースト	52
9-2. 町の様子	52
9-2-1. 煙突	52
9-2-2. 路上駐車	53
9-2-3. 人の様子	53
9-3. 大学内の様子	54
10. 所感	55
物質理工学院/B1	55
生命理工学院/B1	57
生命理工学院/B1	58
環境・社会理工学院/建築学系/B2	61
生命理工学院/生命理工学系/B2	62
物質理工学院/材料系/B2	63
生命理工学院/生命理工学系/B2	65
環境・社会理工学院/融合理工学系/B2	66
工学院/電気電子系/B2	68
環境・社会理工学院/土木環境工学系/B3	69
生命理工学院/生命理工学系/B3	71
工学院/情報通信系/B3	73
物質理工学院/応用化学系/B3	74
情報理工学院/情報工学系/B4	79
参考文献	82

1. 海外派遣プログラムの目的（渡航マニュアルより引用）

本プログラムは、本学の定める国際経験を満たすプログラムとして実施され、国際経験により養われるべき素養は以下の通りである。

留学や留学以外の国際的な活動による異文化交流の体験を通し、以下の3つに関わる意識、態度、能力を養う。

- 1) 視野の拡大：自身の固定観念に執着せず俯瞰的な視野に立って、グローバルな問題と自身の関わり等について、そのつながりや広がりを理解し、新しい価値観を得る。
- 2) グローバルコミュニケーション力の向上：異なる母語や価値観を持つ相手に対し、自身の意見や知識を分かりやすく伝え相手の意見を聞き、意見交換をし、相互理解を深める。
- 3) 多様性の尊重と協働：自身のアイデンティティについての自覚をもとに、自身と異なる慣習、常識等を尊重し、他者と協働できるようになる。

2. 参加学生の紹介と研修日程

2-1. 参加学生の紹介

No	所属	学年	役割
1	生命理工学院	B1	現地発表エディター
2	生命理工学院	B1	調べ学習&グループ調査コーディネーター
3	物質理工学院	B1	HP レポート記事執筆
4	工学院 電気電子系	B2	発表資料エディター
5	物質理工学院 材料系	B2	交流企画
6	生命理工学院 生命理工学系	B2	現地発表エディター
7	環境・社会理工学院 融合理工学系	B2	調べ学習&グループ調査コーディネーター
8	生命理工学院 生命理工学系	B2	フィードバック
9	環境・社会理工学院 建築学系	B2	リーダー
10	生命理工学院 生命理工学系	B3	報告書エディター
11	環境・社会理工学院 土木・環境工学系	B3	報告書エディター
12	物質理工学院 応用科学系	B3	交流企画
13	工学院 情報通信系	B3	交通
14	情報理工学院 情報工学系	B4	発表資料エディター

2-2. 派遣プログラム日程

日付	時間	訪問先・スケジュール	宿泊
2/25	10:00 15:40	羽田空港発 ロンドンヒースロー空港着	Hotel ibis London Earls Court
2/26	10:30 12:00 12:35	National Physical Laboratory 訪問 Lab tours Presentation Lunch (Meet with scientists/networking)	
2/27	10:00 10:50 12:00 13:00 14:00	Imperial College London 訪問 Presentations from Imperial PhD students Lab visit Lunch with Imperial Students Science Tokyo student presentation Campus Tour with President's Ambassadors	
2/28		Queen Mary University of London 訪問 Presentation, Campus Tour	
3/1		グループ調査	
3/2	12:30 14:33	King's Cross 駅発 York 着	University of York Derwent P Block Ensuite
3/3	10:00 11:15 12:45 14:00 15:30 19:00	University of York DEPARTMENT VISITS AND LECTURES: Environment and Geography DEPARTMENT VISITS: Physics, Engineering and Technology Lunch LECTURE: Communicating Science to Non-experts Welcome event & presentations (with UoY Student Mentors) Exchange STUDENT MEET UP (YSEP)	
3/4		英国日産自動車製造 訪問 会社説明、工場見学、Q&A	
3/5	9:00 11:15	University of York UoY STUDENTS EXPERIENCE (with UoY Student Mentors) DEPARTMENT VISIT:	

	12:45 14:00 15:30 19:00	Wolfson Atmospheric Chemistry Laboratories LUNCH (with UoY Student Mentors) Discussions on Higher Education (with UoY Student Mentors) KEYNOTE TALK LANGUAGES FOR ALL (with UoY Students Learning Japanese)	
3/6	9:00 12:30 14:59 16:48	University of York DEPARTMENT VISIT: Computer Science Lunch ヨーク駅発 King's Cross 駅着	Hotel ibis London Earls Court
3/7	19:00	ロンドンヒースロー空港発	機中泊
3/8	17:55	羽田空港着	

3. 事前学習

3-1. 連合王国の紋章

紋章とは、個人や家系や組織などを識別し、特定するために利用されている。西洋での紋章は、もともと戦場の騎士が私の所属を示すため、盾に模様を描いたのが始まりだとされる。一族が同じ紋章を使用する日本の家紋とは違い、イギリスでは地位（領地）を相続した当主だけが使用する。複数の地位（領地）を有するときは、それぞれの地位（領地）の紋章を組み合わせることもある。



図 3.1.1 紋章の組み合わせ

図 3.1.2 に現在の王家の紋章を載せた。左側の紋章は盾を4分割し、第1／第4クォーターにイングランド王の紋章、第2クォーターにスコットランド王の紋章、第3クォーターにアイルランドのシンボルであるケルトの豎琴が描かれている。これはイングランド王としての紋章であり、スコットランド王としての紋章はイングランドとスコットランドの紋章の位置が入れ替わっている。



図 3.1.2 イングランド国王としての紋章（左）、スコットランド国王としての紋章（右）

3-2. UK での生活

3-2-1. ロンドンの地下鉄

ロンドンでは地下鉄が非常に発展しており、これを利用することで非常に快適にロンドンを移動することができる。電車にはクレジットカードのタッチ決済で乗ることができ、料金形態は日本と違いゾーン制となっている。また、トンネルの形の違いなどから一部の路線は Tube と呼ばれている。[1]



図 3.2.1 Tube

3-2-2. イギリスの朝食

イギリスの朝食の定番は、ベーコン、目玉焼き、マッシュルーム、トマト、ハッシュドポテト、ソーセージ、ベイクド・ビーンズなどを盛りつけた豪勢なプレートとトーストと一緒にいただくものになっている。とても量が多く満足感があることで有名である。[2]



図 3.2.2 イングリッシュ・ブレックファスト

3-3. ヨーク大学生との交流

ヨーク大学生との交流では、まず私たちがイギリスについて調べたことの発表をグループで行った後、ヨーク大学について留学生から話を伺った。この発表の中で、私たちがインターネットで調べてもわからなかった生のイギリスについての話を聞くことができた。例えば、私たちがもともと行こうとしていたスーパーは高級志向の店であったため、現地の人が良く使う安くていいスーパーについて教えてくれた。その後、クイズをしたり、折り鶴と一緒に作って日本文化に触れてもらったりして仲を深めた。



図 3.3.1 折り紙で鶴を作っている様子



図 3.3.2 みんなで記念撮影

4. UK 概要

4-1. UK の基礎情報

4-1-1. 基礎情報

UK(United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland, グレートブリテン及び北アイルランド連合王国)は、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの4つの国から成る。首都はロンドンで、主に使用されている言語は英語である。また、主宗教は英国国教会である。通貨は、スターリング・ポンド (£) が使用されている。[3] UK と日本の面積と人口を表 4.1.1 で比較する。[3][4][5]

表 4.1.1 UK と日本の面積と人口

	UK	日本
面積	24.3 万 km ²	37.8 万 km ²
人口 (2024 年)	6,760 万人	1 億 2378 万人

2025 年 3 月現在のイギリス首相はキア・スターマー (Keir Starmer) であり、2024 年 7 月 5 日に就任した。労働党所属の首相としては 14 年ぶりである。[6]

また、2025 年 3 月現在の君主はチャールズ 3 世 (本名: チャールズ・フィリップ・アーサー・ジョージ, Charles Philip Arthur George) である。2022 年 9 月 8 日、母であるエリザベス 2 世の崩御を受けて、国王に即位した。元妻は故ダイアナ元妃であり、ウィリアム皇太子やヘンリー王子は、チャールズ 3 世とダイアナ元妃の間に生まれた。[7]

4-1-2. UK の産業

イギリスは産業革命が世界で最初に起きたことから「世界の工場」と呼ばれていた。イギリスのランカシャーでは、産業革命初期に綿工業が栄えた。また、かつては世界中に植民地を持っていたことから「日の沈まぬ国」(植民地のどこかでは日が出ているため)とも呼ばれていた。

現在の主要産業としては、自動車、航空機、電気機器、エレクトロニクスなどが挙げられる。輸出、輸入ともに、自動車や医薬品及び医療品が主な貿易品である。名目 GDP は、2023 年現在世界第 6 位となっている (日本は世界第 4 位)。[8]

4-1-3. UK の地理

イギリスは、ヨーロッパ大陸の北西に位置し、グレートブリテン島 (ロンドンを含む島) と、アイルランド島の一部、周辺の島々から成る。その領土は、図 4.1.1 において赤い点線で囲まれた部分である。



図 4.1.1 UK の領土

イギリスは概ね日本よりも緯度が高いが、アイルランド島の西を流れる北大西洋海流と偏西風の影響で、比較的温暖な気候となっている。北部は南部に比べて気温が低く、東部や南部の降雨量は若干少ない。日照時間は年間を通して大きく変化し、夏至では約 16 時間なのに対し、冬至では約 8 時間である。[9]

イギリスの冬の天気は基本的に雨であると言われているが、今回の滞在中はほとんど晴天であった。

4-1-4. UK の議会

イギリス議会は上院と下院の二院制を取る。上院は貴族院とも呼ばれ、日本では参議院がこれに対応する。下院は庶民院とも呼ばれ、日本では衆議院がこれに対応する。

上院と下院の相違点を表 4.2.1 にまとめる。なお、以下で言及する議席数は 2024 年 7 月現在の値である。

表 4.1.2 上院と下院の比較[3]

	上院	下院
英語名	The House of Lords	The House of Commons
構成員	一代貴族、世襲貴族、聖職者	18 歳以上の英国国民及び英連邦諸国民 又はアイルランド共和国国民
選出方法	任命制など	小選挙区制の選挙
議席	786 議席（定数はない） うち保守党 277 議席、	定数 650 議席 うち労働党 411 議席、

	労働党 172 議席、 聖職者 25 議席	保守党 121 議席
任期	終身（聖職者は職にある期間）	5 年（解散あり）

上院を特徴付けるものとして、クロスベンチャーの存在がある。クロスベンチャーとは、三大政党（労働党、保守党、自由民主党）のいずれも支持していない無所属議員のことであり、その議席数は全体の約 4 分の 1 を占めている（181 議席）。二大政党である労働党と保守党の議席は、互いに向かい合うように配置されており、この間に置かれた席がクロスベンチャーに割り振られている。上院において、主な政党内派はそれぞれ党首、党内幹事、スポークスマンを設けている。しかし、クロスベンチャーには代表者はいるが幹事はいない。このクロスベンチャーの独立性は上院の大きな特徴である。[10]

4-2. UK の歴史

イギリスの歴史の中から、重要な出来事を 2 つ挙げる。

4-2-1. マグナ・カルタの制定

マグナ・カルタ（Magna Carta）は、1215 年に制定された憲章である。国王の権限を制限しており、立憲主義や人権の概念の土台となった。マグナはラテン語で「大」、カルタは「憲章」をそれぞれ意味する。

マグナ・カルタは、当時のイギリス国王ジョンが、貴族や上層市民による反乱軍の要求に応じて署名したものであり、前文と全 63 ケ条から成る。その主な内容は、国王の徴税権の制限、教会における選挙の自由、都市の自由、不当な裁判による逮捕などの禁止である。また、法の支配と議会政治の原則を含んでおり、基本的人権と立憲君主制を柱にするイギリス憲法において重要な役割を果たした。しかし、マグナ・カルタはラテン語で書かれており、一般庶民向けの書物ではなかった。また、ジョン王の次に国王に即位したヘンリ 3 世は、マグナ・カルタを無視して新たな課税を行うなど、17 世紀のイギリス革命まで、その存在は重視されなかった。その後は、アメリカの独立宣言（1776 年）やフランス革命（1789～1795 年）などに大きな影響を及ぼしたとされている。

マグナ・カルタの原本はリンカン大聖堂、ソールズベリー大聖堂に保管されている。また、大英図書館には、マグナ・カルタの決定版（1225 年発行）が保管されている。さらに、2015 年には、マグナ・カルタの発布 800 年を記念する式典が行われ、当時のエリザベス女王も列席した。このことから、マグナ・カルタが現在のイギリスでも重要視されていることが伺える。[11]

4-2-2. EU 離脱

イギリスは 1973 年に、EU（欧州連合）の前身である EC（欧州共同体）に加入した。しかし、2016 年の国民投票で過半数が EU 離脱を支持したことにより、2020 年に EU を

離脱した（離脱の完了は 2021 年）。イギリスの EU 離脱は、British と exit を組み合わせて Brexit と呼ばれている。



図 4.2.1 イギリスの EU 離脱を歓迎する人々

イギリスが EU を離脱した主な理由は、中東欧諸国から EU 内を移動してイギリスへやって来る移民に対する不満である。当時新たに EU に加盟した東欧諸国は景気があまり良くない一方、イギリスは比較的景気が良く職も得やすかった。EU 内では人の移動が自由であるため、東欧諸国からイギリスへ移民が急増した。そのため、医療や教育などの行政サービスに負担がかかるようになったが、EU に加盟している以上は人の移動を制限できないため、EU に対する懐疑的な見方が広まった。国民投票の結果、大都市以外のほとんどの地域では離脱が支持された。[12]

国民投票以降、EU 加盟国からの移民は大幅に減少したが、2020 年以降、EU 非加盟国からの移民が急増している。これは、就労ビザを取得した労働者と留学生によるものと考えられている。[13]

4-3. UK の人物

イギリス出身の偉人・著名人の中から 2 人を紹介する。

4-3-1. ウィリアム・トムソン (William Thomson)

ウィリアム・トムソンは、イギリスの物理学者である。1824 年生、1907 年没。熱力学、電磁気学、地質学などの多くの分野で業績を上げた。10 歳で大学入学を許可され、22 歳で大学教授に就任した。1848 年、絶対零度（あらゆる物質のエネルギーがゼロになる温度）を -273°C とした絶対温度目盛りを導入した。1851 年には熱電効果の 1 つであるトム

ソン効果を発見した。これは、金属上で温度の異なる 2 点間に電流を流すと、熱の出入りが発生するというものである。同じ年には、「吸収した熱を全て仕事に変えることはできない」として永久機関を否定した熱力学第二法則（トムソンの原理）も発表した。さらに、1858 年には、大西洋を横断する海底電信ケーブルを敷設した。こういった数々の業績から、1892 年にケルビン男爵の爵位が与えられた。温度の単位 K（ケルビン）は、彼の名前に因んでいる。[14]



図 4.3.1 ウィリアム・トムソン

4-3-2. ウィンストン・チャーチル (Winston Churchill)

ウィンストン・チャーチルは、イギリスの政治家であり、第 61・63 代首相を務めた。1874 年生、1965 年没。第二次世界大戦の時期に首相としてナチス・ドイツとの戦いを指揮した。絶体絶命と思われた危機的状況の中で、ナチス・ドイツに降伏することなく徹底抗戦を貫き、最終的に連合国軍を勝利へと導いた。また、アメリカのフランクリン・ローズベルトやソ連のスターリンなどと戦後構想を構築し、国際連合の設立にも重要な役割を果たした。有名な「鉄のカーテン」演説では、ソ連と共産主義国の軍事的脅威を指摘し、反共産主義国の結束を呼びかけた。この演説は、東西冷戦の幕開けを告げるものと捉えられ、大きな反響を呼んだ。チャーチルは指導力に優れており、今なお、イギリス史上最も尊敬するリーダーとして選ばれることがある。

チャーチルは文豪としても知られている。第一次、第二次世界大戦についてそれぞれ歴史的な記録を残しており、1953年には、「第二次大戦回顧録」でノーベル文学賞を受賞した。[15]



図 4.3.2 ウィンストン・チャーチル

5. ロンドンの概要

5-1. ロンドンの基礎情報

ロンドンは、イギリスの首都であり、イングランド南東部に位置する。人口は約 886 万人(2022 年集計)であり、面積は 1572 平方メートルである。[16][17]

ロンドンはイギリス最大の都市であり、政治・経済・文化の中心地である。

政治面では、ロンドンはイギリスの中心地として機能しており、国会議事堂や首都官邸、各省庁の本部などの政治的に必要な機関がロンドンに位置している。

経済面ではロンドンは世界有数の金融センターであり、EU 離脱後も数多くの金融機関が欧州最大の拠点をロンドンに構えている。[18]



図 5.1.1 ビッグベン周辺の様子

ロンドン市内は交通機関も発達しており、ロンドン地下鉄（Tube）、バス、鉄道、タクシーなどが市民の移動を支えている。特に、ロンドンのタクシーは黒い車体で「ブラックキャブ」として有名であり、観光客にも人気がある。また、ロンドンは自転車インフラの整備も進んでおり、都市内でレンタサイクルの利用が広がっている。

加えて、市内にはイギリス王室の宮殿やウェストミンスター寺院などの歴史的建造物がある他、大英博物館をはじめとした美術館や博物館が多くある。加えて「007」、「ハリーポッター」、「シャーロックホームズ」をはじめとした多くの映画やドラマの舞台になっている。[18]

そして、ロンドン是世界有数の多文化都市であり、国籍や言語、文化が融合した民族の集団がロンドン市人口に占める割合は 55% であり現在増加している。[19] 英語が公用語であり約 98% の人が英語を話すと推定されるが、ロンドンには 300 を超える言語が存在し、世界で最も言語的に多様な都市の 1 つとなっている。[20] 宗教面では、キリスト教徒が最多であるが、イスラム教、ヒンドゥー教、シク教、ユダヤ教などの信仰もみられる。[21]



図 5.1.2 ウェストミンスター寺院

5-2. 歴史

現在のイギリスの首都ロンドンは、ローマ時代には属州ブリタニアの中心ロンディニウムとしてローマ人が建設した。ローマ帝国の属州ブリタニアの中心都市として整備されたが、410 年にローマが撤退しアングロ＝サクソン諸国の支配が始まった。中世にはイングランド王国の都として繁栄し、その後イギリスの帝国化に伴い、世界経済、国際政治の中心として重要な都市となった。[22]

中世には、アングロ＝サクソン系のイングランド王国の首都ロンドンとなり、代表的な中世商業都市として発展した。11 世紀にはノルマン人がイングランドを征服し、ウィリアム 1 世がロンドンを守るために要塞ロンドン塔を建設した。[23]

近代にはウェストミンスターが政治の中心、シティが世界経済の中心として市域を拡大した。17 世紀の大火後に近代都市として再建され、1851 年の万国博覧会の開催など繁栄を誇った。20 世紀には、二度の世界大戦で大きな被害を受けたが、戦後の復興を遂げ、現在では世界的な金融・文化の中心都市としての地位を確立している。第二次世界戦により 2 度中断されていたオリンピックであるが、戦後初のオリンピックがロンドンで 1948 年に開催された。[24]



図 5.2.1 ロンドン塔



図 5.2.2 1948年のオリンピック

5-3. 人物

ロンドンは、多くの歴史的人物を輩出してきた都市である。

文化・芸術の分野では、映画監督・俳優として活躍したチャーリー・チャップリン (Charlie Chaplin) [25] が代表的な存在であり、無声映画の黄金時代を築いた。また、音楽界ではザ・ビートルズ (The Beatles) やローリング・ストーンズ (The Rolling Stones) といったバンドが世界的に有名であり、ロンドンの音楽シーンに大きな影響を与えた。文学では、「クリスマス・キャロル」「オリバー・ツイスト」などの作品で知られる作家チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) が、19世紀の社会を描いた小説を多く執筆した。

スポーツの分野では、元サッカー選手のデイヴィッド・ベッカム（David Beckham）が世界的に人気を誇り、ロンドンを本拠地とするアーセナルやチェルシーなどのクラブチームも国際的に高い評価を受けている。



図 5.3.1 チャーリー・チャップリン

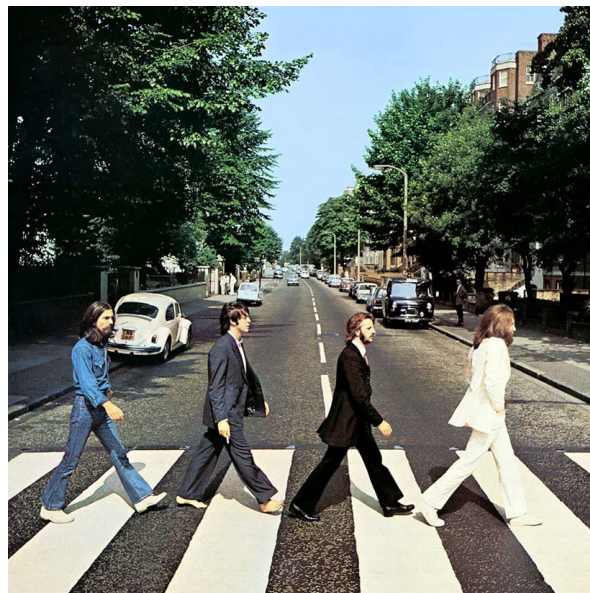


図 5.3.2 ビートルズ

6. ヨークの概要

6-1. ヨークに関する情報

6-1-1. ヨークの基本情報

面積

：約 272 平方キロメートル（105 平方マイル）である。小さな市域で、都市部の周囲には小規模な村落が点在している。[26]

人口

：202,821 人である。（2021 年国勢調査）この中には 26,694 人の全日制学生が含まれている。[27]

宗教

：93,192 人（約 46%）が「無宗教」と回答している。（2021 年国勢調査）[27]

通貨

：ヨークはイギリスの一都市であるため、通貨はイギリスの公式通貨である英ポンド（GBP）が使用されている。[28]

政治体制

：イギリス全体としては立憲君主制および議会制民主主義を採用している。[28] 地方行政上、ヨーク市は単一自治体であり、ヨーク市議会が郡に属せずに全ての地域行政サービスを提供している。[26]

6-1-2. 地理



図 6.1.1 ヨークの地図[34]

位置

：北緯 53.96 度、西経 1.07 度に位置する。[29] イングランド北部のノース・ヨークシャーの中心部に位置し、ロンドンから約 280km 北方、鉄道で約 2 時間の距離にある。[26]

地形

：ウーズ川とフォス川の合流点に広がる都市であり、肥沃な低地の氾濫原に立地する。市内はおおむね平坦で、過去には洪水のリスクも高かったが、地形は水運や農業に適している。[30]

気候・自然

：温帯海洋性気候に属し、冬は比較的穏やかで、夏は涼しく湿度が高い。年間を通して降水量は安定しており、川沿いの環境には豊かな自然や緑地、公園が点在する。[30]

歴史と地理の関係

：地理的に軍事・交易上の要所であり、紀元 71 年にローマ軍によって軍団要塞「エボラクム」が建設された。ウーズ川とフォス川の合流点という立地は、ローマ時代からヴァイキング、中世、近代に至るまで都市の成長を支えてきた。また、鉄道の発展によって近代には英国有数の交通・商業都市としても繁栄し、地形と交通のつながりが歴史的発展に結びついている。[30]

6-1-3. 主要産業

伝統的に鉄道産業とチョコレート製造業（菓子産業）で発展したが、現代ではサービス業主体の経済へと転換している。

経済状況

：ヨークの経済規模は年間約 61 億ポンド（2020 年推計）とされる。16～64 歳の就業率は 83.6%で全国平均を上回り、失業率は 1.7%と低い。[35] 主要企業には市役所、NHS、アビバ PLC、ネスレ、ネットワーク・レールなどがあり、地域経済を支えている。生産性も高く、ヨークは地域で最も効率的な都市経済と評価されている。[36]

社会的特徴

：2021 年の国勢調査によると、ヨークの人口は約 202,800 人で、過去 10 年の増加率は 2.4%。65 歳以上の人口は 15.8%増加し、高齢化が進んでいる。白人系が多いが、多様化も進んでいる。[27] 住民の生活水準は高く、健康指標や平均余命も良い。高等教育修了者も多く、大学はヨーク大学とセントジョン大学の 2 校があり、約 2 万人の学生が在籍している。初等・中等教育や福祉サービスの質も高い。[26]

文化的特徴

：ヨークは紀元 71 年に建設された歴史都市であり、中世にはイングランド第二の都市として栄えた。ヨーク・ミンスターや中世の門など歴史的建築が多く残る。[37] 伝統文化も盛んで、「ヨーク・ミステリー・プレイ」や「ヨルヴィック・バイキング・フェスティバル」などの行事が継承されている。ユネスコの創造都市「メディアアーツ都市」にも指定され、芸術・観光都市としても知られている。[26]

6-2.ヨークの歴史

6-2-1.ローマ時代



図 6.2.1 ローマ軍団兵の再現パレード

紀元 71 年、ローマ帝国の第 9 軍団ヒスパナが司令官ペティリウス・ケリアリスの指揮で現在のヨークに進軍し、ウーズ川とフォス川の合流点に軍団要塞エボラクムを築いた。[31] 初期は土塁と木の柵で守られていたが、107～108 年頃には石造の城壁と多角塔（マルタンギュラー・タワー）に改修された。3 世紀初めには自治権を持つ植民市（コロニア）となり、ブリタンニア北部の拠点となった。[32] 皇帝セプティミウス・セウェルスやコンスタンティウス・クロルスがこの地で没し、306 年にはコンスタンティヌス 1 世が皇帝に推挙された。[31] 現在も博物館庭園にはローマ時代の城壁や多角塔が残り、中世の城壁にもその痕跡が見られる。[32]

6-2-2. ヴァイキング時代

9 世紀、ノーサンブリア王国に属していたヨークはデーン人の襲撃を受け、866 年にイーヴァー・ザ・ボーンレスとハルフダンの軍に占領された。彼らは都市を「ヨルヴィック（Jórvík）」と改名し、ここにヴァイキング王国の首都を築いた。[31] ヨルヴィックは約 100 年間支配され、農業や手工業、交易で発展した。特に北海交易の拠点として栄え、ウーズ川を使った流通で経済が活発になった。市域は広がり、ローマ時代の城壁跡には新たな土塁が築かれた。[32] 現在の「ストーンゲート」や「ピーターゲート」といった通り名の「ゲート（gate）」は、古ノルド語の「ガタ（gata：通り）」に由来し、ヴァイキング時代の名残である。[31]

6-2-3. 中世



図 6.2.2 中世ヨークの城壁と背後にそびえるヨーク・ミンスター

ノルマン征服（1066 年）以降、ヨークは北イングランドの政治・宗教・商業の中心都市となった。1086 年のドゥームズデイ・ブックによると、市域の土地の半分は王室のもの、残りはノルマン貴族が所有していた。1089 年にヨーク・ミンスターの再建が始まり、ヨークは宗教都市として発展した。セント・メアリーズ修道院も中世有数の豊かな修道院として知られた。13～14 世紀には石造の城壁や四つの門が整備され、クリフォーズ・タワーも建てられて、都市防衛の要となった。[32] 経済も商人ギルドの発展で栄え、マーチャント・アドベンチャラーズ・ホールや市庁舎ギルドホールが建設された。後期中世には「北部の都（Caput Ebor）」と呼ばれ、ロンドンに次ぐ都市とされていた。[31]

しかし 15 世紀以降は、薔薇戦争や羊毛産業の移転などにより衰退が始まった。1530 年代の宗教改革では修道院が解散され、多くの宗教施設が失われた。[32]

6-2-4. 近現代

18～19 世紀の産業革命により、ヨークは近代都市として発展した。特に鉄道の整備が進み、1840 年代には実業家ジョージ・ハドソンの主導のもと鉄道の中核都市となった。1877 年に開業したヨーク駅は、当時ヨーロッパ最大級の駅であり、その壮麗な構造はヴィクトリア朝建築の象徴となった。同時期に菓子製造業も発展し、ラウントリーズやテリーズといった地元企業が国際的な名声を博した。鉄道と食品産業の成長により、ヨークは経済的繁栄を維持した。[33]

第二次世界大戦後は観光と教育の都市として新たな方向性を見出した。1963 年には国立のヨーク大学が創設され、現在では 2 万人を超える学生が在籍する国際的な学術拠点となっている。観光業も活況を呈し、歴史遺産を生かしたまちづくりが進められている。[32]

今日のヨークは、伝統的な街並みと先端産業が共存する都市であり、世界中から多くの観光客が訪れる国際的な文化都市となっている。[33]

6-3. 施設紹介

6-3-1. ヨーク・ミンスターについて

ヨーク・ミンスターは、イングランド北部ヨーク市にある英国国教会の大聖堂であり、北ヨーロッパ最大級のゴシック建築として広く知られている。正式名称は「ヨークの聖ペトロ首府主教座聖堂（The Cathedral and Metropolitan Church of St Peter in York）」であり、ヨーク大主教の座所としてイングランド北部のキリスト教の宗教的中枢を担ってきた。

その歴史は7世紀にまで遡り、627年にはノーサンブリア王エドウィンがこの地で洗礼を受けたという記録が残っている。以後、大聖堂は長い年月をかけて増改築が重ねられ、現在の建物は13世紀から15世紀にかけて完成された。建築全体が「神の栄光をたたえるため」に設計されたとされ、その細部にはキリスト教の物語や象徴が精巧に刻み込まれている。

ヨーク・ミンスターの最大の特徴の一つは、世界有数の中世ステンドグラスのコレクションである。特に「グレート・イースト・ウィンドウ」は、面積にして約311平方メートルあり、15世紀に製作された世界最大級のステンドグラスで、聖書の黙示録を主題にした壮大な図像が描かれている。これらのステンドグラスは、当時の職人たちの高度な技術と信仰の深さを物語る重要な文化財である。実際にこれを見なかったことに後悔が募る。また、訪問者は大聖堂の中央塔に登ることができ、275段の階段を上るとヨーク市街を一望することができる。この塔からの眺望は、都市の歴史的景観と自然環境の調和を感じさせる絶好のスポットとなっている。

現在のヨーク・ミンスターは、宗教施設としての機能に加えて、観光・文化・教育の場としても大きな役割を果たしている。日々の礼拝に加えて、聖歌隊による音楽プログラム、クリスマスやイースターなどの特別礼拝、さらには現代的な光と音のプロジェクトンマッピングなども開催され、多様な人々に開かれた空間となっている。私が訪れた際もプロジェクトンマッピングのイベントが行われており、幻想的な光と音に包まれた大聖堂の姿は非常に印象的であった。内部には入らなかったが、外観を間近で見ただけでもその壮麗さを実感できた。

1300年にわたる歴史の厚さを体現する建築遺産ヨーク・ミンスターは、今もなお「聖なる場所」として人々の祈りと関心を集め続けている。[38]



図 6.3.1. プロジェクションマッピング 1



図 6.3.2 プロジェクションマッピング 2

6-3-2. 国立鉄道博物館

国立鉄道博物館（National Railway Museum）は、イングランド北部のヨーク市に位置し、英国の鉄道遺産を保存・展示する世界最大級の鉄道博物館である 1975 年に開館した。

同館は、「鉄道の過去、現在、未来を通じて世界をつなぐ」というミッションのもと、蒸気機関車から高速列車、鉄道模型、切符や制服、ポスターなど幅広く展示されている。特に有名なのが、世界で最も知られた蒸気機関車「フライング・スコッツマン（Flying Scotsman）」や、日本の新幹線 0 系車両であり、鉄道技術の国際的発展を象徴するものとなっている。

館内には、実物の列車が展示された「グレートホール」などの展示空間があり、鉄道の歴史と文化を五感で体験することができる。また、子どもや学生向けの学習プログラムや

インタラクティブ展示も充実している。入館は無料（任意の寄付制）であり、市民や観光客に広く開かれた施設となっている。[39]

実際に見てみると、鉄道一つ一つに個性を感じられた。電車のすぐ上や下を通れるようなところがあり、普段見る機会のないものを見ることが出来て、良い経験になった。



図 6.3.3 国立鉄道博物館 新幹線



図 6.3.4 国立鉄道博物館 全体

7. 訪問先の詳細

7-1. 国立物理学研究所について

7-1-1. 組織概要

NPL(National Physical Laboratory)は、ロンドン郊外、テディントンにある、世界でも有数の物理学・計測科学に関する国立研究機関である。1900年に設立され、800人を超える研究者が在籍しており、200以上の組織とパートナーシップを組んでおり、80を超える大学と提携のある、対外的な活動も活発な研究機関である。[40]

NPLでは、「PGI」といういわば仮想的な機関に属する200人以上の修士・博士課程の学生が研究活動を行っている。PGIにはイギリス各地から学生が属し、NPLでの共同研究機会が与えられる。[41]



図 7.1.1 集合写真

7-1-2. 講義の内容

まず、軽いティーブレイクをしながら NPL の概要について説明をいただき、そのあと 2 つの研究室訪問をさせていただいた。次に、Bushy House に移動し、NPL の研究者・学生も交えた空間で本留学のメンバーである B4 情報工学系の 1 人が研究発表を行った。そのあと、NPL の PhD の方が研究発表を行った。最後に、昼食を立食でとりながら、研究発表の場にいらっしゃった NPL の方々と交流を深めた。留学が始まって初めての交流機会だったので、初めは緊張したが、だんだんと慣れていった。



図 7.1.2 昼食



図 7.1.3 交流会の様子

7-1-3. 研究室訪問

研究室訪問では2つの研究室を訪問させていただいた。

1つ目は、電気自動車などに応用先のある、電子回路についての研究を行っている研究室である。電子回路が、さまざまな温度、圧力、湿度の下でどのように作動するかという実験が、大きな実験施設の中で行われていた。電子回路は様々な製品に応用されているが、企業だけでは十分なテストが行えないことも多いので、企業から依頼されたテストを行うこともあるそうだ。

2つ目は、バイオメトロロジーに関する研究室である。研究室の中の様子は、東京科学大学の生命系、とりわけ分子生物学系の研究室の様子とよく似ていた。説明をしてくださった方は、この研究室でルシフェラーゼ遺伝子についての研究をしているとのことだった。[42]他には、遺伝子の輸送システムや、バクテリアによるタンパク人工合成など研究は多岐にわたるが、生物測定学と名前が付くだけあって顕微鏡の設備が特に整っているように感じた。

7-1-4. 研究発表

東京科学大学からは情報理工学院情報工学系4年の1名が「High-Frequency Time-Series Analysis of the Mouse Gut Microbiota」(「マウスの腸内細菌叢の高頻度時系列解析」)をテーマに研究発表を行った。発表・質疑応答はすべて英語で行われた。

私は学士課程2年生で、まだ自分の研究テーマを持っていないが、あと数年後にはこのメンバーのように自信をもって自分の研究を発表できるようになりたいと、よい刺激を受けた。

NPLからは、ワット天秤の巨大化に関する研究発表が行われた。私の門外の分野であることもあり、理解が難しかったが、彼女の研究者としてのキャリアについての説明もあり、興味深かった。



図 7.1.4 東京科学大学学生による研究発表

7-2. インペリアル・カレッジ・ロンドンについて

7-2-1. 大学概要

インペリアル・カレッジ・ロンドンは1907年に設立され、現在9つのキャンパスがある。私たちが訪問したキャンパスはサウスケンジントンにあり、大学のちかくにはロンドン自然史博物館やヴィクトリア&アルバート博物館などがある。また、世界の大学ランキングで2位、ヨーロッパでは1位を獲得している。[42]



図 7.2.1 Royal Albert Hall

7-2-2. 講義、訪問時プログラムの概要

- 9:30 インペリアル・カレッジ・ロンドンに到着
- 9:40-10:00 インペリアル・カレッジ・ロンドンの説明を受ける
- 10:00-10:40 インペリアル・カレッジ・ロンドンに留学中の学生のプレゼンテーション
- 10:50-11:20 研究室見学① : Carbon Capture Pilot Plant
- 11:20-11:50 研究室見学② : Carbon Capture and Storage Multi-Scale Imaging Lab
- 12:00-13:45 学生交流
- 13:55-14:45 キャンパスツアー



図 7.2.2 キャンパスツアー

7-2-3. 研究室訪問

1) 研究室① : Carbon Capture Pilot Plant

1 階と 2 階が繋がっており、天井が高い部分と、階段で 2 階に上がれる部分があった。私が訪問したことのある東京科学大学のどの実験室よりも大きかった。実験結果などを考察するような研究室はまた別の部屋だった。実験室で研究員の一人が研究内容を説明してくれた。実験室に入るためには白衣と安全眼鏡を装着する必要があった。



図 7.2.3 研究室見学の様子

2) 研究室② : Carbon Capture and Storage Multi-Scale Imaging Lab

研究室には大きなモニターとパソコンが置いてあり、奥がガラス張りで実験施設が見えるようになっていた。実験室は何階分も繋がっていて大きな装置が置いてあった。実験室で何かが起こってしまったときは研究室のパソコンとモニターでトラブルシューティングをする仕組みになっている。実験室では、白衣と安全眼鏡に加えてヘルメットを着用する必要があった。

7-2-4. 学生交流

昼食を食べながらインペリアル・カレッジ・ロンドンの日本人会の学生たちと交流した。東京科学大学の学生から日本についてのプレゼンテーションを行った後、クイズを出題したり日本からのお土産を渡したりして盛り上がった。お土産はカップラーメンや日本のお菓子、東京科学大学のトートバッグなどを渡したら喜んでもらえたので良かった。全員ではないが、東京科学大学とインペリアル・カレッジ・ロンドンの学生で夜に学生バーで食事をした。



図 7.2.4 学生との交流

7-3. ロンドン大学クィーンメアリー校について

7-3-1. 大学概要

ロンドン大学クィーンメアリー校は、その歴史を 1785 年に設立された「ロンドン病院医科大学」にまでさかのぼる。この医科大学はイギリス初の公式医学校とされ、医学教育の礎を築きました。また、1882 年には女子のための寄宿制カレッジとして「ウェストフィールド・カレッジ」が設立され、ロンドンで最初的女子寄宿制カレッジであると同時に、19 世紀後半に女子向けに開校した英国でわずか 4 校のうちの 1 校として重要な役割を担った。その後、クィーンメアリー校は複数のカレッジや研究機関との合併を経て発展を続け、現在のロンドン大学クィーンメアリー校へと至っている。[43]

専攻分野は大きく「人文社会学」「理工学」「医学歯学」の 3 つに分かれ、その下に多岐にわたる学部・学科・研究所を設置している。[44] 学生数は学部生・大学院生を含めて約 33,000 名（フルタイム・パートタイム双方）にのぼり、170 カ国以上の国籍をもつ多様な学生コミュニティを形成している点も大きな特徴だ。[45] また、STEM フィールドの女子生徒の割合も高く、生物系の学部では女子生徒の割合は 50%を超える。こうした国際色豊かな環境と長い歴史に培われた教育・研究の実績が相まって、クィーンメアリー校は世界的にも高い評価を得ている。最近では、インターネットや AI の普及に伴いテスト形式による評価への脱却にも力を入れえており、レポートなどでの評価に切り替わっているという。

7-3-2. 講義概要

今回、二人の博士課程の方と一人のポスドクの方による自身の研究分野についての発表を聴講する機会があった。まず、一人目のポスドクの方は「PALPABLE」と呼ばれる検査の段階で、ある物体が腫瘍かどうかを“固さ”によって判断する医療ツールの開発について

説明した。この技術は触診の原理を高精度に応用し、腫瘍の早期発見や診断の精度向上につながる可能性を示すものであった。

二人目の博士課程の方は、「リサイクルを目的とした可逆的硫黄架橋型天然ゴムエラストマーの最適化」について発表した。具体的には、タイヤなどのゴム製品を安価かつ効率的にリサイクルできる技術の開発が中心であり、硫黄架橋構造を再利用可能（可逆的）にすることで、廃棄物削減やコスト低減を目指しているとのことであった。

三人目の博士課程の方は、「チューブ内で生体組織に対して血液や組織液などの液体を循環させる」ということについて説明した。さまざまな種類の細胞を用いて、実験系の中で組織に灌流を行うことで、細胞や組織の生理学的反応を観察し、新たな研究知見を得ることを目的としている。

これらの発表はいずれも高度な内容であったが、私自身の専門分野であれば部分的に理解できるものの、専門外の分野に関しては専門用語や研究の前提知識の不足から、話についていけない場面があった。特に、英語でのプレゼンテーションだったため英単語の意味を十分に把握できないことがあったほか、その分野の基礎的な背景知識や社会的な課題・研究動向について理解不足であったことも、理解を難しくしていた要因だと感じた。今回の講義を通じて、専門以外の領域について学ぶ際には、研究分野特有の用語の把握だけでなく、その分野全体の背景や社会的意義、技術的基礎など幅広い知識が必要だと改めて認識した。

7-3-3. 研究室訪問

今回、ロンドン大学クイーンメアリー校のマイル・エンド・キャンパスにある理工系学部の研究室を訪問した。最初に見学した航空関連の研究室は、二つの階層構造になっており、下の階層を中心に研究活動が行われている印象を受けた。そこでは、自ら設計した機械や装置の性能を測定するための機材が一式そろっており、幅広い実験や検証が可能な環境となっているようである。

また、化学系の学生実験が行われる施設も見学する機会があった(図 7.3.1)。3D プリンターが設置されていたのが印象的で、実験・研究の一環として活用できる点に魅力を感じた。こうした先端技術を取り入れることで、学生の学習・研究の幅がさらに広がるのではないかと期待される。

全体的に、どの研究室も清潔感があり、多様な機材が充実していると感じた。また、室内の壁面や扉などにガラスが多用され、外からでも実験の様子が見えるようになっている点が特徴的であった(図 7.3.2)。そのおかげか、研究室内は明るく、研究活動の透明性も高い印象を受けた。今後、さらなる研究成果が生まれていく場として非常に魅力的な環境であると考えられる。



図 7.3.1 実験室

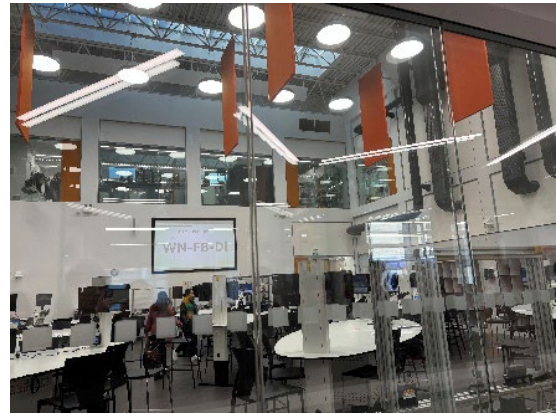


図 7.3.2 研究室の様子

7-3-4. 学生生活

先の研究室訪問と同様、キャンパス内の建物はガラスを多用した開放的な造りになっており、外からでもどの部屋でどのような研究・活動が行われているかが分かりやすい。こうした設計によって、学生は異なる専門分野にふれる機会が増え、多分野に興味を抱くきっかけになるのではないかと感じた。

ある棟の上階に設けられた自習スペース(図 7.3.3)は、壁がガラス張りになっていて見晴らしが非常に良く、ここで学習することは大変魅力的に思われた。また、同じ棟の一階部分には自習兼広場のスペースがあり、多くの学生が談笑や勉強をしており、活気あふれる雰囲気が印象的だった。キャンパスの中心的な建物には「オクタゴンルーム」と呼ばれる壮大な空間があり(図 7.3.4)、特定サイズの書籍を 25 万冊も収容可能な書庫を備えている。[46] 天井には歴史上の偉大な科学者の名前が刻まれており、その場にいるだけで研究意欲をかき立てられるような、学問的雰囲気に満ちた場所であった。

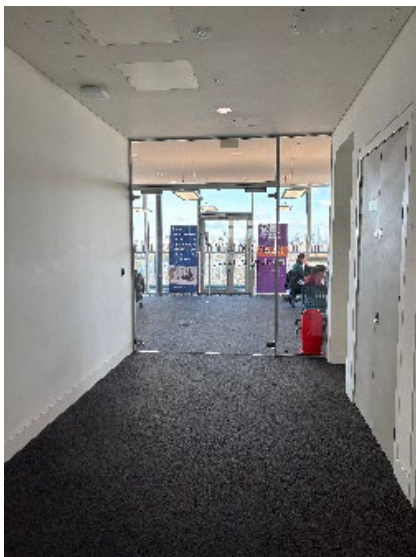


図 7.3.3 自習スペース



図 7.3.4 書庫

さらに、敷地内を流れる川や飼育されている動物など(図 7.3.5)、ロンドン市内とは思えないほど自然豊かな環境が整っているのも特徴的である。こうした自然に囲まれたスペースは、学生たちがリラックスしながら交流できる憩いの場となっており、落ち着いた雰囲気の中で学習や研究に打ち込むことができると感じられた。

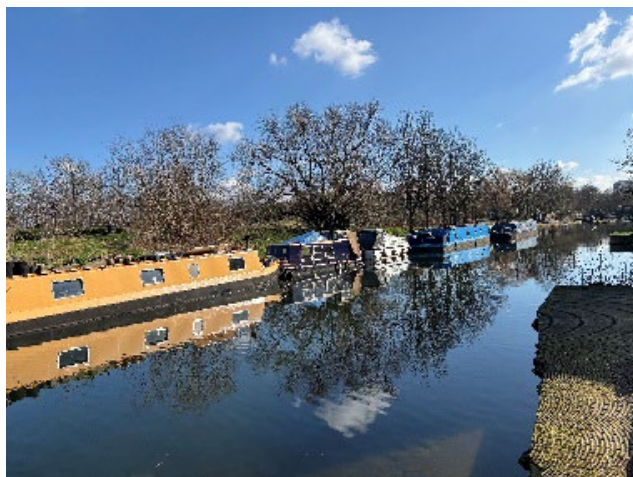


図 7.3.5 敷地内の川

7-4. ヨーク大学について

7-4-1. 大学概要

ヨーク大学(University of York)はイギリスノースヨークシャー州ヨーク市にキャンパスを置く、イギリスの公立大学である。創立は 1963 年であり、現在は 20,000 名を超える学生と、5,000 名を超える教職員が在籍している。また、学生は 150 ヶ国以上から集まっており、学生の 28%は英国外の出身である。次にランキングを見てみる。世界中の大学の上位 6 %の位置し、2,857 機関の内、146 位であり、英国内では 18 位である。[47] また、教育部門において Gold for teaching(Teaching Excellence Framework 2023)と、研究部門において、トップ 10(Teaching Excellence Framework の Teaching Excellence Framework)の両者を獲得した英国でわずか 4 校の大学のうちの 1 つである。キャンパスの建築物は歴史のある古いものから、最近建てられたばかりのモダンなものまでたくさんある。[48]



図 7.4.1 キャンパスの建造物

また、キャンパスは自然にあふれていて、リスやウサギ、様々な種類の鳥が見られる。特に鳥は人馴れしており、生協で餌を買って、餌やりをすることができる。



図 7.4.2 メンターが餌やりをしている様子

7-4-2. 講義概要

1) 1 日目

環境と地理学の専門である Dr. John Wilkinson から自身の研究分野についての講義を受けた。体内に取り込まれた薬品や化学物質の未分解のものが環境に放出されているなどの話がとても興味深かった。

また、午後には Mr. Gallagher から語学の授業を対話形式で受けた。専門家ではない一般市民へ研究内容を説明するときにはどのようにするべきかというもので、専門用語をなるべく使わずにいかにわかりやすく伝えるかということに取り組んだ。言葉に詰まりながらも相手に自分の意見が伝わり、とても難しかった。



図 7.4.3 講義の様子

2) 3 日目

この日の午前中は各々、メンターと行動した。私は生命理工学院であったため、メンターの専攻は生物学であった。生物学の講義棟に案内され、そこで実験を一緒にやった。実

験の手順はもちろん英語で書かれていたが、以前やったことのある実験内容であったため、多少は理解することができた。また、実験器具はほとんど日本と同じで、実験の授業は日本と大きく違った点はなかった。

7-4-3. 研究室訪問

1) 1日目

この日は物理学、工学の学部の実験室を訪問した。Mr. White が様々な実験室を案内してくれた。中でも印象に残ったのは、金属の引張強度を測定する実験室で、実際に金属を使って実験をしてくれた。また、他にも学生が課題で作った船の模型や、壁で囲われた迷路の中を自走して目的地まで向かうようにプログラムされたロボットなどを見ることができた。学生が作業するスペースはとても広く、日本の大学と比べて遥かに広がった。

2) 3日目

この日は Dr. Pete Edwards が Wolfson Atmospheric Chemistry Laboratories を案内してくれた。Wolfson Atmospheric Chemistry Laboratories では大気汚染や室内空気汚染について研究しているところで、Dr. Pete Edwards は大気中のガスの分析装置の開発を行っている。また、建物全体が1つの研究所であり、その中に用途別で部屋が分かれていた。大気を分析する装置が置いてある部屋や、装置を基盤など、一から製造する部屋や、出来上がった装置を測定する部屋などに分かれていて、一つ一つ案内してくれて、どの部屋も興味深いものばかりでとてもおもしろかった。

7-4-4. 学生交流

1) メンターとの交流

私たちが主に関わったヨーク大学生はメンターである。メンターは私たち2~3人に対して1人で付いてくれて、ヨーク大学の滞在中、大学の案内や、一緒に講義を受けたり、遊んだりもした。初日にメンターとの初めての交流会が行われた。お互いに自己紹介をした後日本の文化についてのプレゼンをした。その後、メンター達と日本の文化として、あやとりを一緒に楽しんだ。これが、意外と難しく、みんなで教えながらやり、作品が完成したときには大盛り上がりだった。



図 7.4.4 メンターとの交流

2) LFA の生徒との交流

3 日目の夜に Languages for All というプログラムで日本語を学んでいる生徒との交流会があった。そこで LFA の生徒 1 人に対して私たちが 2~3 人ついて、先生が決めたテーマについて日本語で自由に話した。とても驚いたのが、LFA の生徒がとても流暢な日本語で話していて、言語の壁をほとんど感じなかったことだ。



図 7.4.5 LFA の生徒との交流

7-4-5. 学生寮の生活について

私たちはヨーク大学滞在中はヨーク大学の学生寮に泊まっていた。一人一部屋が与えられ、部屋は綺麗で、共同キッチンまで備えられていた。私はヨークの市街地で食べた日もあったが、2 日間、寮のキッチンで料理をした。学内に NISA という生協の売店があり、そこで食材を買うことができる。食材は日本と比べると劣るものもあったが、おいしく料理をすることができたと思う。また、キッチンは寮内の唯一の共同スペースであるため、おしゃべりをしたり、夜にボードゲームをしたこともあった。寮生活は私たちの距離をより縮めるものになった。



図 7.4.6 寮の様子

7-5. 英国日産自動車製造について

7-5-1. 会社概要

ヨーク大学から出発し、マイクロバスに乗って二時間ほどで行き着いた英国日産自動車工場（サンダーランド工場）は、イギリス国内で最大規模の自動車工場であり、日産の欧州での中心的な生産拠点であり、従業員数 6000 超え、さらに高い生産性を持つ。日産にはこのような生産拠点を世界中に 21 個持ち、主に日本、中国、アメリカの方に集中している。なお、今回訪問した工場は主に製造に取り組んでいるもので、他には販売戦略、研究、機能テスト、設計などに取り組んでいる拠点も多くある。

工場の製造と供給能力には驚いた。1986 年に開設されて現在、サンダーランド工場は二つの生産ラインを持ち、一つのラインから一台の車を完成するのに平均一分程度をかける。年内平均生産 44 万台で、イギリス産車の三割を占め、イギリス産車の輸出の八割を占める。毎年イギリスの経済に 20 億ポンド以上を貢献している。2024 年までには電気自動車をリードする「LEAF」の生産を続いて、合計 250 万台を供給した。現在は主にイギリスで人気の二つの車種「Qashqai」と「Juke」の生産に取り組んでいる。その中 Qashqai は 2022 年度にイギリス自動車のトップセラーとなっていて、両方もイギリス自動車の人気十位に入っている（両方 SUV である）。



図 7.5.1 工場の玄関

7-5-2. 講義等概要

講義では主にサンダーランド工場の現状について詳しく紹介された。世界各地に日産の工場があるにも関わらず、地域の特性に応じて消費者に受け入れられる車種が違ったり、原材料の調達と使用にも規制がある。車両の製造においてイギリス産の材料をいくらか分使わないと罰金が課せられる。他には、関税の調整により原材料の調達をどうするかについて、日々新しい課題に対応する。

車の製造の関する課題も多々あり、車体の重さを削減する一方で強度を保つことを確保し、それから電気自動車に使われている電池の重さを削減することが主になっている。

日産は車の製造だけでなく、若手の人材育成と確保もきちんとしている。工場が建てられて以来、5,000 人超えの大学卒業生が製造関係の仕事に関わり、85,000 人超えの子供が日産の基礎技能教育を受けた。



図 7.5.2 講義の様子

7-5-3. 工場見学概要

工場は約 17 つの部門により構成されている。その中の講義で取り上げられたものを紹介する。まずは「Press Shop」、ここでは製造の最初の工程が行われ、車両の内外装パネルがプレス成形される。ここにはさらに二つのラインがあり、両方鉄のプレス成形を扱え、片方がアルミニウムを扱える。廃棄物となった九割のアルミニウムを圧縮して再利用できる。アルミニウムの導入により車両全体の重さは軽減するが、強度もその分落ちるので、設計の段階から構造と強度を考えている。次は「Body Shop」、メインラインの一部としてプレス工場から供給された金属パネルを受け取り、塗装前の車体を製造する工程を行う。ここでは 1052 台のロボットが配属されて、100%機械によって溶接が行われる。機械と人間がそれぞれ得意な分野が違うので、作業を分けて活用している。「Battery Assembly」、ここでは Qashqai ePower Battery と Juke Hev Battery の組み立てが行われている。600 キログラムの電池を電気自動車につけるのが大きなチャレンジになっており、いずれ克服すべき課題となっている。他には車体の色付けや刈り込み整える作業もある。

今回見学させていただいたのはライン 2 の方である。こちらは全長 945 メートルがあり、Qashqai ICE と Juke ICE | HEV の生産を行っている。従業員はその担当の場だけでなく、他の人の不在に備えて二、三つのところを担当できるように教育されている。備品はお客さんの注文の順番に並んでおり、それぞれの担当が基本その場に正しい部品との認識に基づいて、材料を取って、作業を行う。生産ラインの最後に最終チェックのステップがある。不合格となった製品は一割未満であり、その場合にまた検修専門のラインに回される。

7-5-4. その他

最後に、Q&A セッションが設けられた。イギリスでの働き方などについていろいろ聞いた。サンダーランド工場では合計 6000 人超えの従業員がいながら、その中日本人の数は 10 人も満たしていない。今回の案内人役を務めた日本人も、出張の形で一年ぐらい派遣されてきた方である。謙遜されていたのかもしれないが、その方が最初に来た時は同僚の話を半分ぐらいしか理解できず苦労されたそう。しかし、製造ラインでの仕事がそこまでコミュニケーションの必要がない仕事だし、同僚の話のキーワードぐらい分かればなんとなく通じるとおっしゃっていた。多分私たちの海外で働くことへの不安を解消したかったのだろう。将来にたとえ日本で日本企業に勤めていても、もし海外で働いてみたいならば、会社に海外出張の意識を伝えることもできる。日本国内と海外では、様々な働き方があるから、やってみなければ分からない。望むなら、いろいろな働き方を体験するのもいいと思う。人生は一つの旅であるので、探しに行かなければ分からない自分もあるというわけなのでしょう。

8. グループ調査

プログラムの一部としてグループ調査が盛り込まれ、3つの班に分かれて事前学習から調べ学習を進め、現地調査に取り組んだ。

8-1. ミュージカル

1班は、ミュージカルについて調査した。ロンドンの本場のミュージカルについて知り、楽しむことを目的とした。事前学習でロンドンのミュージカルの詳細や歴史について調べ、現地で実際にミュージカルを観に行き、本場の雰囲気を知ることとした。

8-1-1. ロンドンのミュージカル

シェイクスピアの故郷でもあるイギリスのミュージカル文化は世界的に有名で長い歴史を誇る。ロンドンにおけるミュージカルの起源は、18世紀の「歌劇」と「喜劇」の要素を取り入れた舞台作品にさかのぼる。当時、ミュージカルはオペラやバレエの影響を受けつつ、歌とダンスを中心にした演劇として成長した。19世紀になると、ロンドンの劇場文化が急速に発展し、特に「ヴォードヴィル」や「オペレッタ」と呼ばれる軽音楽劇が人気を集めた。これらは、後のミュージカルの土台となったジャンルである。20世紀に入ると、ロンドンでは音楽と演劇がより密接に融合した本格的なミュージカル作品が登場した。最初の大きな転換点は、1920年代に起こったアメリカンミュージカルの影響である。アメリカのブロードウェイで成功を収めた作品がロンドンにも上演され、特にジャズやスウィング音楽が取り入れられた。これにより、ロンドンのミュージカルはより多様化し、観客層の拡大に貢献した。

ロンドンのウェストエンド(West End)はニューヨークのブロードウェイと並ぶ世界の二大劇場街として知られている。ウェストエンドは、ロンドン中心部に位置する劇場街で、数多くの有名な劇場が集中している。この地区は、1900年代初頭からミュージカルの中心地となり、現在でも世界中からの観光客を魅了していて、毎日たくさんの公演が行われている。大きな特徴として、一つの劇場で様々な演目が行われるのではなく、演目ごとに専用の劇場があることが挙げられる。昼公演は14:00-15:00 開演 ～ 17:30-18:30 頃 終演で、夜公演は19:00-19:30 開演 ～ 22:00-22:30 頃 終演である。

ロンドンのミュージカルには数多くの名作がある。例えば、アンドリュー・ロイド・ウェバー作曲の『オペラ座の怪人』は1986年に初演され、ウェストエンドで長期上演されている代表作となった。また、1980年代には『キャッツ』や『レ・ミゼラブル』といった作品も登場し、特に『レ・ミゼラブル』は、フランス文学を基にした壮大な物語と深い感動を与える歌詞が特徴で、数十年にわたり上演され続けている。

近年では、映画やコミックを原作にした作品の上演も増えており、例えば『ハリー・ポッターと呪いの子』や『ライオン・キング』などがウェストエンドで大ヒットしている。これらは、ファンタジーや冒険の要素を取り入れつつ、強いメッセージ性を持った内容で観客を魅了している。



図 8.1.1, 図 8.1.2 West End の様子

8-1-2. Les Misérables(レ・ミゼラブル)@Sondheim Theatre 19:30~22:30

私たちは多くのミュージカルの中からレ・ミゼラブルを選んで見に行った。レ・ミゼラブルは世界で最も長く上演されてきた演目である。一階席の後ろから2番目くらいの席だったが、全然問題なく楽しめた。私はミュージカルを見に行くこと自体が初めてだったので、まずミュージカルがどういうものなのかをそこで知った。ただただその歌唱力や演技に圧倒され、その迫力に驚いた。特にクライマックスで「Do You Hear The People Sing」(民衆の歌)の大合唱は鳥肌が立った。19:30開演で1時間半ほど経つと第1幕が終わり、20~30分ほどの中休みがあって、22:30に終演だった。劇場内にバーのようなものがあり、ワインを飲みながら楽しんでいる人もちらほら見かけた。面白い場面で現地の人たちは周りの目を気にせず大きな声で笑ったり、歌い終わるたびに大きな拍手が巻き上がったりして文化の違いをととても感じた。さらに、終演のときにはスタンディングオベーションが起こっていた。当たり前だが全編英語なので、リスニングが難しくストーリーが分からないときついので入念な予習をしていくと楽しめると思う。またロンドンで違う作品も観てみたいと思った。



図 8.1.3 Sondheim Theatre の外観



図 8.1.4,図 8.1.5 劇場内の様子

8-2. 東京とロンドンの街の比較(グループ2の調査)

私たちのグループは東京とロンドンの街の共通点と相違点を調査した。観光名所や図書館、デパートなど様々な場所を訪れ、行く先々でいろいろな発見をした。その中でも私たちが特に日本との違いを感じた3つの場所について詳述する。

8-2-1. スーパーマーケット

日本のスーパーマーケットにはある程度の序列が存在しているが、それはイギリスでも同じであった。私たちがイギリスで生活する上で訪れたスーパーを2つ紹介する。

1) Tesco

イギリスで最も高いシェア率を誇るのが Tesco である。[49] イギリス各地で見かけられるチェーン店で、中価格帯のスーパーである。日本でいう AEON(イオン)と似たような立ち位置である。私は現地の知り合いに日本へのお土産はここで買うことをおすすめされたため、紅茶とチョコを購入した。

YORKSHIRE TEA はヨーク大学のメンターさんがおすすめしてくださった。彼曰くイギリスで一番おいしい紅茶だそうだ。また、After Eight はヨーロッパで人気のミントチョコレートである。チョコミントが大好きな友達には絶賛された。



図 8.2.1 Tesco で購入したお土産

2) Marks & Spencer

通称 M&S(エムネス)で知られる高級・高品質系のスーパーマーケットである。よく英国の成城石井と例えられているが、私はそれ以上であると感じた。店内は非常に清潔感があり、商品もきれいに陳列されていた。日本では当たり前かもしれないが、イギリスの他社のスーパーと比べると、格の違いは一目瞭然であった。一番驚いたことは、ほぼすべての商品を自社ブランドで揃えていたことである。日本のスーパーにはないブランド力を感じた。余談であるが、私はここでも紅茶のお土産を購入した。50 パックで£3 程度だったので、紅茶はかなりコスパがよく、お土産にも打ってつけである。



図 8.2.2 M&S で購入したお土産

8-2-2. 公園

イギリスには、日本のような遊具のある小さな公園はほとんど見当たらなかった。その代わりに、自然豊かな大きな公園があった。私たちが訪れた公園を2つ紹介する。

1) Hyde Park



図 8.2.3 Hyde Park

Hyde Park はロンドンで最も広い敷地面積を誇る王立公園である。私はロンドン市内を巡る途中に少し立ち寄っただけであるため、Hyde Park のほんの一部分を見ただけであるが、それでも野鳥やリスを観察することができた。園内の人々は優雅に寝転がったり、散歩したり、トレーニングをしたりしていた。また子供たちは元気に走り回っている様子も見られた。Hyde Park はロンドン市民にとって憩いの場であると感じた。

2) St Jame's Park



図 8.2.4 St Jame's Park の野鳥

St Jame's Park は Hyde Park からそう遠くない場所にある公園である。有名な観光名所である Big Ben や Westminster Abbey の近くにあるため、この公園の通行人は観光客が多い印象を受けた。園内には池があり、多種多様な野鳥が集まっていた。なお、園内の道路にはガチョウの糞が落ちているので踏まないように注意したい。

8-2-3. マーケット

イギリスでは様々な場所でマーケットが開かれていた。日本でいうと、市場というよりはお祭りに近い雰囲気イベントであった。私たちが訪れたマーケットを2つ紹介する。

1) Camden Lock Market



図 8.2.5 Camden Lock Market

Camden Town は独創的なアートやロック・ヘビーメタル系のサブカルチャーが盛んな街である。休日に訪れたためか、現地の人や観光客で非常ににぎわっていた。はじめは日本の若者文化の発祥地である原宿に似たような場所だと考えていたが、訪れてみて雰囲気は新大久保の韓国横町に非常に似ていると感じた。出店している店舗は様々あり、ギター専門店や帽子専門店、懐中時計のお店などを巡った。メンバーの一人はここで帽子を買っていた。普通のお店とは違い、値札はないので値段はお店の人に聞くしかなかった。短時間しか滞在できなかったため、今度訪れる際は个性的なお店をじっくり見て回りたい。なお、休日 Camden Town 駅は日本の通勤ラッシュと同じくらい混みあっているため、バスで往来するのが良いと感じた。

2) Portobello Road Market



図 8.2.6 Portobello Road Market

Notting Hill はカラフルな街並みでありながら、全体として落ち着きがあり、おしゃれな感じがした。ロンドンの中でも比較的高級街のようで、東京で例えると代官山に近い印象を受けた。この地区で開かれるロンドン最大級の蚤の市が Portobello Road Market である。平日にも開催されているが、日によって開店しているお店が異なる。すべて開いているのは土曜日なので、私は土曜日に訪れた。Camden Lock Market では個性的なお店が多い印象を受けたが、こちらではアンティークのお店が多く、骨董品や食器、家具などが販売されていた。実のところ、私がここに訪れたのはマーケットが目的ではない。ここ Notting Hill は映画「ノッティング・ヒルの恋人」の舞台となった場所である。私はこの映画が大好きで、聖地巡礼として訪れた。

図 8.2.7 に示す写真は映画の主人公が住んでいた家の写真である。映画を観たことがない人からすれば、ただの青い扉の家なのだが、20 年以上前の映画の舞台が変わらず残っていることに私は非常に感動した。Notting Hill に訪れる人にはぜひともこの映画を観てから訪れることを強くおすすめしたい。



図 8.2.7 主人公の住んでいた家

8-3. イギリスを舞台にした作品と町の関係

イギリスは、「シャーロックホームズ」「名探偵コナン」「ハリーポッター」「逆転裁判」「ピーターパン」「パディントン」をはじめとして多くの有名作品の舞台になっている。私たちの班は、小説やアニメ、映画の舞台となっている場所が多くあるイギリスで、「聖地巡礼」の文化と観光業の関係や、作品の中の描かれ方と実際の街の様子の違いを検証することを目的に、「名探偵コナン」「ハリーポッター」の2つの作品の聖地を訪れた。

8-3-1. 名探偵コナンとロンドン

名探偵コナンにはロンドンを舞台にしたお話がある。マンガでは71巻、アニメでは616～621話に該当する話である。私たちは、イギリスでの研修中に、コナンに出てくるロンドンの3つのスポットを実際に見てきた。

1つ目はシャーロックホームズ博物館である。作中の博物館スタッフは、警備員のような制服を着ていたが、実際はホームズの仮装のような服装をしており、世界観が再現されていた。また、作中ではコナンが、ホームズが座っていたとされる椅子に座り、はしゃぐ様子が描かれていたが、実際は立ち入り禁止であり、座ることができなかった。作品は10年以上前に描かれているため、昔は立ち入りできたのかもしれないが、現状は作品内と少し異なっていた。しかし、図のように、作中で読み取れる博物館の構造と実際の構造や家具の配置は似通っていることが分かった。



図 8.3.1 ホームズ博物館の外観



図 8.3.2 博物館の内観



図 8.3.3 作品内の内観

2つ目はシャーロックホームズの像だ。ホームズの像は Baker Street station の正面にあり、観光客にもわかりやすい位置に設置してあった。作品内では、登場人物である毛利蘭とミネルバ・グラスが会う場所として設定されている。そのシーンを見ると、当時条人物の身長はホームズ像の半分ぐらいであり、私たちがとった写真の縮尺と似通っていた。作品内での縮尺まで忠実に再現されていることに驚いた。

3つ目はビッグベンの前にある電話ボックスだ。作品内では登場人物の工藤新一が毛利蘭に告白するシーンとして有名である。作品内では普通の電話ボックスであったが、実際に見るとシールが全体に貼られてあり、まるで別の電話ボックスのような見た目になっていた。電話ボックスはコナンファンの間でも有名な聖地のため、観光地化されているのではないかと考えていたが、そういったことはなさそうだった。



図 8.3.4 ホームズ像



図 8.3.5 電話ボックス

以上より、名探偵コナンの世界の中でのロンドンと、実際のロンドンは多少なりとも違いがあることが分かった。先述したとおり、10年前に描かれている作品のため、年月の流れとともに、ロンドンの町の一部として変容していていることを感じた。

8-3-2. ハリーポッターとイギリス

イギリスの代表的な作品であるハリーポッターの世界の一部は、イギリスの町を参考にして作られている。今回は、ハリーポッターの世界の原案となった2つの場所を訪れた。

1つ目はレドンホールマーケットの「グラスハウス」という眼鏡店だ。このお店は映画で、ハリーポッターとハグリッドが、ホグワーツで必要な物を買うために漏れ鍋へと向かうシーンのロケ地として使われている。現在は青く塗りつぶされてしまっており、映画内の様子とは異なるが、扉の形や柱の位置はほとんど一致していた。店の横にはハリーポッターのロケ地になっているという張り紙が付いており、観光客にもわかりやすくなっていた。また、このお店はレドンホールマーケットの裏路地のようなところとあり、魔法の世界への入り口のようなわくわく感を感じられた。



図 8.3.6 作品内の様子



図 8.3.7 実際の様子

2つ目はイングランド北部・中世の街ヨーク(York)のシャンプルズ(Shambles)通りである。欧州で最も多くの人々が訪れる路地とも言われており、私たちが訪れた際も多くの人でにぎわっていた。この通りは、杖や本、食べ物、箒など魔法に関する商品を扱うお店が軒を連ねるダイアゴン横丁のモデルになっていると言われている。元々は肉市場の中心地であったそうだが、現在はハリーポッターグッズを売るお店やおしゃれなカフェなどが並び、観光地化されていた。

以上より、ハリーポッターの聖地になったことで街がそれに対応している様子が見て取れた。元々の町の様子が観光客に合わせて変容してしまうことは、必ずしもいい面とは言えないかもしれないが、観光客が増えることで街が豊かになっているという側面もあるのではないかと感じた。



図 8.3.8 シャンプルズ通り

9. その他

9-1. 食事

イギリスのご飯は美味しくないということを留学前からよく聞いていたので食事に関しては不安があったが、実際食べてみるとどれも美味しく、まずいと感じることはなかった。イタリアンやインド料理等の他国料理も多く食事面で不便に感じることはあまりなかった。しかし、特にロンドンでは、物価が高すぎるというのがネックではあった。留学前の事前学習等でイギリスに行ったら朝食、フィッシュアンドチップス、サンデーローストを食べるべきという話を聞いていたため、今回はその3つを特に書いていこうと思う。

9-1-1. 朝食

私たちが滞在中に食べた朝食はビュッフェスタイルで、フライドエッグ、スクランブルエッグ、ベーコン、ソーセージ、ハッシュドポテト、ハム、マッシュルーム、ビーンズ等から好きなものを選べた。トーストやマフィンと合わせて食べたり、ブラックファーストティーを淹れたり、朝からテンションが上がったのを覚えている。フルーツやヨーグルトは、日本で食べなれているものよりも酸っぱかったり、味が薄かったりした印象を受けた。こんなに豪華な朝食になっているのは、もともと産業革命の際に、労働者階級に向けて夕方までお腹が持つようにするためであった。衛生環境が悪かったその当時の名残で、一度すべて加熱調理してあるのも一つの特徴だ。[50]



図 9.1.1 朝食

9-1-2. フィッシュアンドチップス

フィッシュアンドチップスは通常、白身魚のフライとフライドポテトのことを指す。タルタルソースやケチャップ、塩やレモンをかけて食べることが多いようだ。フィッシュアンドチップスを提供している店は多く、店によってポテトやソースに個性が見られるため、食べ比べしてみるのも面白いかもしれない。このフィッシュアンドチップスもまた産業革命期の19世紀中頃に誕生した。街中に溢れかえった労働者が、安価で栄養があり、そして短時間で食べられるようにと考案されたと言われている。[51]



図 9.1.2 Fish&chips

9-1-3. サンデーロースト

サンデーローストはその昔、地主が小作人をねぎらって日曜日に肉のロースト料理をふるまったことが起源だと言われている。ビーフ、ポーク、チキンなどの肉をオーブンで焼き上げ、それにジャガイモやニンジンなどの根菜をつけあわせてヨークシャーピングと呼ばれるシュー生地のようなカップ型の薄いパンの上にのせ、トロミのついた温かいグレービーソースをかけていただくのが基本である。[52]私が食べに行ったときは、ビーフとチキンが売り切れていたためポークで注文したが、これもまた非常においしかった。この留学が決まるまでサンデーロースト自体知らなかったが、現地の学生からも強くおすすめされるほど人気のある料理で、イギリスを訪れた際にはぜひ食べてみてほしい。



図 9.1.3 サンデーロースト

9-2. 町の様子

イギリスに着いて真っ先に感じる日本との違いはやはり、歴史ある赤レンガの建物だ。東京ほどの高層ビルは並んではおらず、どこまでいっても赤レンガや重厚感のある建物が並んでおり、これぞイギリスだなという風景が途切れない。ロンドンにはあらゆる国から来た人であふれており、アジア人もかなり多く、日本よりも多様性というものを感じた。この節では、私が実際にイギリスの街を歩いていて印象に残ったことを3つほど紹介しようと思う。

9-2-1. 煙突

イギリスの家には煙突がついていることが多く、さらにその煙突の上に小さな突起物がいくつか乗っている。これはチムニーポットと呼ばれ、建築デザイン最盛期の19世紀頃は、チムニーポットが家の重要なデザイン要素となり、華やかなヴィクトリア時代の多種多様なバリエーションが見られる。古い家にはほぼ各部屋に暖炉があり、その暖炉の数だけチムニーポットがあったため、その本数で家



図 9.2.1 イギリスの家

の部屋の数がわかっていたという。1920 年頃には、暖房方法も暖炉からオイルヒーターへと替わっていき、新しく建てられる家には煙突がないのが一般的となっている。今日では、取り除かれたチムニーポットが、花や緑を植え込むポットとして再利用されている。

[53]

9-2-2. 路上駐車

イギリスの街でよく見かける光景として路上駐車があげられる。東京でもよく見ると思うが少し違って、進行方向と逆向きに路上駐車している車も見られた。家の前にも路上駐車している車が多かったため、駐車場がない家も多いのかもしれないと感じた。



図 9.2.2 路上の様子

9-2-3. 人の様子

これは街の様子とは少し違うかもしれないが、とても印象に残ったことだ。私は、初めての海外ということもあり、チップを払わないと雑な接客をされるとか、アジア人差別を受けるとかいう不安を渡航前は持っていた。しかし実際には、イギリスに着いて店員さんや現地の人と関わるなかで差別を感じたことは一度もなかったし、チップを払っていなくても嫌な対応をされることもなかった。お土産屋や洋服屋では、店員さんや他のお客さんが気さくに話しかけてくれて軽い世間話を交わしたり、飲食店ではイギリスを楽しんでくれよとデザートをサービスしてくれたりした。また、日本から来たと伝ええると、多くの人が興味を持ってきて、自分が知っている日本語を披露してくれた。働き方という点では、勤勉な日本的観点からするともっと真面目に働いてほしいと思ってしまう人もいるかもしれないが、お客さんと気軽に会話し、スタッフ一人一人が楽しみながら働いているという印象を受け、個人的にはいい仕事環境だなと感じた。

9-3. 大学内の様子



図 9.3.1 JAZZ NIGHT

イギリスの大学を訪れて感じたことは、規模の大きさだ。一つ一つのキャンパスが広く、建物も豪華で圧倒された。オックスフォード大学でいえば、オックスフォードという都市そのものが大学都市という規模の大きさで、なかなか日本では見られない光景だと感じた。学内の施設も魅力的で、現地学生に聞いたところ、各キャンパスに学生バーと呼ばれるバーがついていることが一般的なようだ。私は、インペリアル・カレッジ・ロンドンとヨーク大学で学生バーに連れていってもらった。学生バーでは、学部生はもちろん、大学院生や教授もお酒を楽しんでいて、交流の場としての機能も持っている。私もそこで何人かの現地学生と仲良くなることができ、いろんなイベント情報を教えてもらったり後日キャンパス外で遊んだりできた。ヨーク大学で言えば、毎週月曜日に JAZZ NIGHT というイベントを行っており、私が仲良くなった現地学生も演奏していて、会場は非常に盛り上がっていた。日本の大学では見ることでできない光景に驚いたが、個人的にはいい取り組みだと感じた。また、勉学や研究にも熱心だと感じる瞬間が多かった。現地学生と話している中で、日本よりも就職の際にその大学で何をして過ごしていたのかが問われる傾向にあると聞いた。そのため、自身の将来のためにも勉強や研究を熱心に行う必要があるようだ。本来の大学生のあるべき姿だと感じたし、イギリスでは普通の光景なのかもしれないが、その意識の高さに刺激を受けた。

10. 所感

物質理工学院/B1

渡航前に想像していたよりもイギリスの人々が優しくて驚いた。街中でお店に入るときに扉を開けて待っていてくれたり、目が合うと微笑んでくれたりするところが日本人と違うなと感じた。また、日本よりも現金しか使えないお店が少なく、現金を持ち歩かなくても留学中は過ごすことができた。事前に聞いてはいたが、物価の高さにも圧倒された。日本であれば1000円で食べられそうな食事がイギリスでは2000円ほどすることがたくさんあって金銭感覚がおかしくなりそうだった。

大学内で最も驚いたことは、男女でお手洗いが共同だったことだ。All gender welcomeと書かれたトイレと車いす用のトイレしかないところがあり慣れなかった。インペリアル・カレッジ・ロンドン、クイーンメアリー・ユニバーシティ・オブ・ロンドン、ユニバーシティ・オブ・ヨークのいずれもキャンパスがとても広大で日本では見たことないほど大きかった。3つの大学の図書館がとても広く、階によって使用目的が分けられていることや、日光が差し込んでいて東京科学大学の図書館よりも明るいところが良いなと感じた。ユニバーシティ・オブ・ヨークのキャンパス内にリス、ウサギ、ハクチョウなどの動物がたくさんいて自然を感じることができたのも良かった。

イギリスでは自分で食べようとしないと生野菜を食べる機会が全くなかったことが食生活において辛い点だった。イギリスの食事はあまり美味しくない聞いていたが、おいしい食事も多くあったので良かった。お米を食べることは多くなく、食べるとしてもジャポニカ米ではなくインディカ米がほとんどだった。学食のメニューやケータリングにはベジタリアンやビーガンの方用の食事が用意されていることが大半だった。インド出身のメンターさんに連れて行ってもらったモスクではインド料理を食べた。雑炊のようなもの、チキンカレー、春巻きを食べたが、どれも日本で食べるものとは味付けがかなり違うように感じた。イギリスのお店で食べた中で気に入ったものはクリームティーだ。クリームティーとはスコーンにジャムとクロテッドクリームを添えたものである。とても気に入ったため渡航中に5回ほど違うお店で食べたが、お店ごとに少しずつ食感が異なっていて面白かった。

プログラムで組まれている予定以外で個人的に観光した中では、レミゼラブルのミュージカルが1番気に入った。1番後ろの席だったため見えないところがある場面がときどきあったが、役者たちの声量が大きく、曲の演奏も素晴らしかったためとても満足した。ロンドンの中心部ではスリが多いと聞いていたため細心の注意を払って行動していた。そのためスリの被害にあることはなかったが、周りに常に気を配っておかないといけないのは少し疲れた。

この超短期海外派遣プログラムを通して、私は長期での留学を真剣に検討したいと考えられるようになった。以前は漠然とした海外留学への憧れや英語を流暢に話せるようになりたいといったモチベーションだけであったが、現在は海外の学生や教授とより深く関わりながら文化を学んだり、生まれ育った地とは違う環境に身をおいて生活することで困難に立

ち向かっていく力をつけたりしたいと考えている。また、外国の人々は冷たくて怖そうといった不安もあったが、実際にイギリスに行ってみると、街中の人や店員さんがとても親切にしてくれたおかげで海外の人に対する印象がとても良いものになった。



ヨーク大学にいたハクチョウ



ロンドンで食べたクリームティー



ウィンザー城で食べたクリームティー

生命理工学院/B1

今回の超短期海外派遣プログラムは私にとってかけがえのない経験になった。海外渡航経験がなく海外留学に興味があった私は、今後の長期留学を見据えてこのプログラムに参加した。元来小さなミスが気になる性質で、英語を話す際に自信がもてなかったのだが、実際に海外で英語を使ってコミュニケーションをとることで自信をつけることができた。

イギリスでは思いがけない発見が多くあった。自由時間にロンドンでいくつかの博物館を見ていく中で、それを支えている寄付文化について知った。イギリスでは日本よりもずっと寄付が盛んで、そのおかげで多くの博物館が運営できているのだと知り、意外なところで日本との違いを感じるようになった。

実は日本に帰ってきて最初に思ったことは、日本中を旅行したい、ということである。イギリスに滞在してイギリスの魅力を知る中で、私は日本をこれほどじっくりと観察したことがあるだろうかと考えた。私はあまり旅行をしたことがなく、日本について詳しくない。日本でおすすめの観光地などを聞かれて、自信をもって答えることができないのは何とも歯がゆいものである。まさか海外旅行ではなく国内旅行がしたくなるとは、渡航前には考えもしなかった。

私はこのプログラムで、多くのことを学ぶことができた。この感想を見て少しでも興味を持った人は、ぜひこのプログラムに申し込みをしてほしい。

最後に、今回のプログラムでかかわったすべての人々に心より感謝を申し上げる。



インペリアル・カレッジ・ロンドンでの交流



ヨーク大学で発見した鳥



ロンドン・アイ

生命理工学院/B1

今回の英国超短期留学を通じて、「人と触れ合うことの大切さ」を強く実感する機会となった。この報告書では、主に大学の環境面と現地でのコミュニケーションの様子について述べる。

まず印象的だったのは、大学内の「透明性の高い設計」である。訪問した三つの大学はいずれも、教室のドアや廊下を隔てる壁にガラスを多用しており、外から授業の様子を確認しやすくなっていた。これにより、授業を受けていない学生が気軽に授業の様子を見学でき、異なる学年や学部の学生同士で関心を広げるきっかけが生まれやすいと感じた。また、授業を受ける側にとっても、周囲の目があることによって集中力が保たれるという効果があるように思われる。

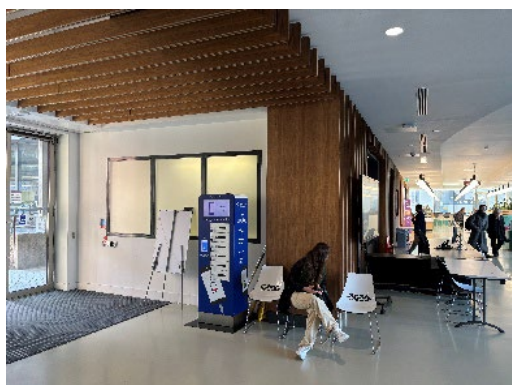


ガラス窓の様子

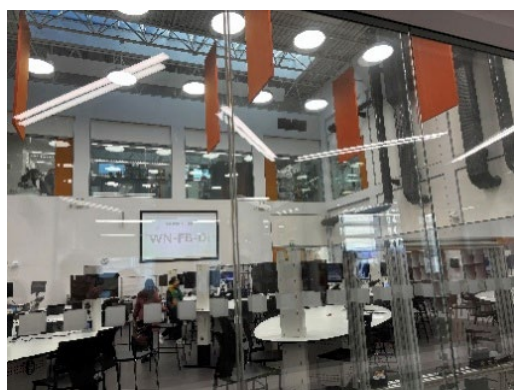
さらに、キャンパス内の各棟のエントランス付近には開放的な自習スペースが設けられており、新たに入った建物の中で学生がどんな話をしているかが自然に耳に入る環境となっている。これにより、自分の専攻とは異なる分野に興味を持つきっかけや、学習意欲を高める効果があると感じた。研究室や大型機器が設置されているスペースでも同様にガラス張りが多く、特にインペリアル・カレッジ・ロンドンでは、数階にわたって続く大規模

な機械群がガラス越しに見えるように配置されていた。その圧倒的な規模や先端技術を、普段の移動経路から自然に目にすることで、学生のモチベーション向上につながっているのだろうと感じた。

私自身、東京科学大学の1年生として過ごす中で、研究室がどのような設備を持ち、どんな研究をしているかを実際に目にする機会はほとんどなかった。したがって、英国のように学内を「見せる」設計にすることは、学生にとって自分の将来の目標をより具体的にイメージできる環境づくりにつながると考える。



キャンパス内のスペース



実験室



最先端の実験器具

次に人との交流の面であるが、英国の大学ではコミュニケーションを促進する取り組みが非常に活発だった。たとえば、学内にバーやパブのような施設を設置している大学が多く、学生同士が気軽に集まって会話を楽しんだり、飲み会を開いたりできる環境が整備されている。実際に私も現地の学生とバーに行って交流する機会を得た。もちろん、そこにいる人々が誰とでも話すわけではなく、グループごとに楽しんでいる印象だったが、大学で知り合った人と親睦を深める際に学内にこうしたスペースがあると、誘いやすくなると感じた。また、ヨーク大学にはバー兼音楽ホールがあり、そこで生演奏を聴きながら会話やダンスを楽しむという、非常に活気あふれる体験をした。日本の大学ではあまり馴染み

のない光景だが、こうした場を通じて互いの距離が一気に縮まり、より多くの人とつながりを持つことができると感じた。



バー兼音楽ホール



バーの様子

さらに、英国の国民性として「誰かと一緒に行動する」文化が強いようにも思われる。特に食事の場面で顕著で、留学期間中、ほとんど一人で食事をしている人を見かけなかった。常に誰かと食事を共にすることが当たり前であり、こうした日常的な習慣も人間関係の構築を促す一因となっていると考えられる。

今回の超短期海外派遣プログラム（UK）では、大学の建築設計や学内施設の透明性、そしてコミュニケーションを促進するための環境づくりが、学生の学習意欲やモチベーションを高めるうえで大きな役割を果たしていることを実感した。特に、透明性の高い研究設備や教室の設計により、学内のさまざまな学問や技術に触れる機会が増え、学生同士や教員との交流が自然に生まれている点が印象的である。

また、人々が食事や余暇をともに過ごす文化は、留学生にとっても積極的にコミュニケーションを図るきっかけとなり、より深い国際交流を体験できると感じた。本学においても、学生同士が気軽に交流し、多様な分野に興味を持ちやすい環境を整えることが大切だと考える。

このようなことはお金がかかるにもかかわらず成果があまり見えにくいことだと思う。しかし、留学の経験を通してそれがいかに大事かを学んだ。本留学での経験を今後の学習や大学生活に活かし、学内外のさまざまなコミュニティで多くの人と関わりを持ちながら学びを深めていきたい。

環境・社会理工学院/建築学系/B2

この留学を通して、私の視野の狭さや知識の偏り、私が普段過ごしている環境がいかに小さいものなのかということを痛感した。特に英語のリスニング・スピーキングに関してはもう何年間も勉強してきているはずなのにこんなにもできないものなのかと私の能力の低さに気づかされた。留学前の事前学習の時には、ヨーク大学から東京科学大学に來ている留学生の方と知り合い、後日二人で遊びに行く機会があった。遊んでいる時の会話はずっと英語だったが、簡単な単語に言い換えてくれたり、ゆっくり話してくれたりしてくれたおかげでいろんな話をすることができた。渡航前に密に英語に携わる機会を得られたことは非常にありがたかったし、なにより日本の文化や流行などに興味を持ってくれて、たくさん質問してくれたことが嬉しかった。イギリスでの生活やおすすめスポットなども教えてくれて非常に感謝している。



留学初日は、本場の英語のスピードや聞きなれない単語に苦戦し、ほとんど相手が言っていることを聞き取れず、とりあえず笑顔で流すということしかできなかった。それでも、何日間か過ごすにつれてだんだん聞き取れるようになっていくことに気づき素直に嬉しかった。この短期間では、訛りがある英語だと簡単な単語でも聞き取ることが出来なかったのが悔やまれるが、そのことを知れただけでもいい経験だったと思う。留学が終わり、英語主体の生活ではなくなってしまうので、また聞き取れない耳に戻らないためにも英語に触れる機会を増やしていきたいと思う。また、人の温かさにも非常に感動した。私はどこか冷たい対応をされるのではないかという不安を抱いていたが、まったく的外れな不安だった。学生だけでなく、パブで横の席に座っていた現地住民や店員さんに至るまで、とても笑顔で会話してくれたし、私の拙い英語も頑張って理解しようとしてくれて非常に嬉しかった。それと同時に経験したこともないのに勝手に冷たい態度をとられるかもと考えていたことが恥ずかしくなった。偏見や固定観念を捨て、勇気をもって新たな経験に一步踏み込んでみると、思いもしていなかった世界が開けるのだと学べた。さらに、イギリスの学生の勉強の取り組み方がとても好きだと感じた。自分の専攻を非常に楽しそうに話してくれたり、熱心に勉強や研究に取り組んだりしている意識の高さに感化された。私は自分の専門を熱心に勉強していたつもりで過ぎなかったのだと痛感させられ、与えられたものだけでなく自ら積極的に課題を見つけ、調べ、研



現地の学生との集合写真

究していくような態度を心がけようと思った。このプログラムを通して、日本以外の文化や生活を初めて体験することが出来、とてもいい刺激をもらえた。短い期間ではあったが、日本語以外での生活や異なる文化を体験できたことはこれからの進路選択や勉強への態度にポジティブな変化を与えてくれると確信している。今後、イギリスに限らずとも、中期・長期の留学に行きたいと感じたし、慣れ親しんだ環境や社会から身を投げ出して、右も左もわからないような世界で自分自身を高めていきたいと思った。このプログラムに応募するかはじめは迷っていたが、あの時勇気を出して応募してみて本当によかった。

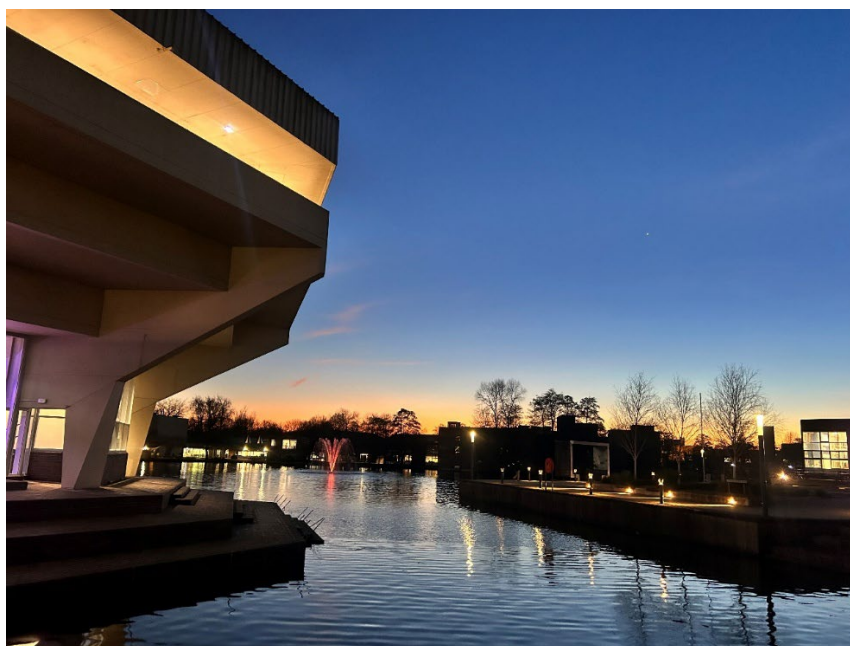
生命理工学院/生命理工学系/B2

私がこの超短期派遣留学への参加を決めた大きな理由は、逆説的に思われるかもしれないが、留学の目的がわからずにいたことである。しかし、このままでは視野が狭くなってしまおうと思い、折角ならば普段の私とは違う、積極的な姿勢で初めての経験と向き合おうと決意した。結果、今回の留学は私にとって忘れられない、とても刺激的な経験になった。参加してよかったと本心から思う。

英語力が向上したことはもちろんだが、ラボ見学での先生や学生への質問、メンターとの交流では、「伝わって欲しいことをどのように伝えるか」ということに多く頭を回した。私と関わりのあったたくさんの方々には本当に魅力的で、コミュニケーション能力の高さを感じた。彼らとの出会いはとても楽しく、この成功経験は私にとって良い刺激になった。また、PhDの方々とはたくさん話ができたことも、私の今後のキャリアの参考になった。大都会でたくさんの方が忙しく行き交うロンドンと、学生の暮らす古い街で広々とのんびりした雰囲気が流れるヨークという2つの都市を拠点に生活し、雰囲気の違いが浮き彫りになった。しかし、ロンドンでも、行き交う多くの人と挨拶をしあったり、日本人であるこの見目で差別を受けた感覚もなかったりするなど、暖かさの残る街だと感じ、イギリスがとても好きになった。

自由時間では、ロンドンの街をたくさん移動したり、現地の物価高もあり、現地のスーパーで買った食材で料理をしたりした。料理をすることは、より自分がイギリスでの生活に近付いている気がしてとても温かい気持ちになった。また、インペリアル・カレッジ・ロンドンで仲良くなった人と時間を過ごすなど、貴重な楽しい時間を過ごした。3つの大学を見学したが、どれも議論や交流に使えるスペースが充実していて、羨ましいと思った。また、見学したラボでは自分の大学よりも個人のスペースが大きく取られていて、開放的な雰囲気にとても好感を持った。

最後に、お世話になった小林先生、菊地さん、その他の関係者の皆さんにお礼を申し上げたい。ありがとうございました。また、この留学を通して初めて出会い、共に行動する中で仲を深めることができたメンバーに、とても感謝している。私自身もとても刺激を受けた。日本に帰ってもこの経験を忘れずに努力し続けていきたいと思う。



ヨーク大学構内にて、夕方の散歩中に

物質理工学院/材料系/B2

この短期留学は最高だった。現地での 10 日間が本当にあつという間で、密度が濃く充実した日々を過ごせた。振り返りたい思い出が多すぎて何から書こうか迷うが、はじめに私がこの短期留学を経て一番大事だと思ったことについて書くことにする。

私は帰宅部である。バイトはしているものの、当時は日々の生活が少々退屈に感じられた。とにかく新しいことを始めようと思いこのプログラムに申し込んだ。面接に合格し、事前学習が始まった。UK のメンバーの中には誰も知り合いがいなかったが、私にとってはむしろそれが良かったかもしれない。新しい環境では、自分の過去にとらわれずに、新しい行動ができると思うからだ。実際、私はどちらかというと内向的な性格であるが、このプログラムの交流係として、UK のメンバーに対しても、イギリスの大学の学生に対しても積極的にコミュニケーションを取り、交流会を盛り上げられたと思っている。それは今までとは違う新しい環境に身を置いたからこそ発揮できた力であると思う。今までと同じ環境で、自分の行動を変えることは難しいから、自分の行動をアップグレードするためには、環境を変えることが大事であると感じた。

ここで終わると、短期留学で学んだことを書いたような、堅い感想文になってしまうので、最後にこの留学の思い出を少し振り返ろうと思う。



思い出の写真

ヨーク大学の敷地内にも野生動物が生息していた。太っ腹なメンターさんに、購買で餌を奢ってもらえたので、授業の合間にカモに餌をあげた。結構な勢いで食いついてくるので、少し手が痛かったが、とても愛らしかった。

ロンドンではジャズバーに訪れた。少し料金は高いが、ジャズミュージックを聞きながら食する夕食は格別に感じられた。

ヨークを去る日、電車に乗るまで 30 分ほど猶予があったため、数人のメンバーと市街地の方にある Shambles へと走った。ここは、ハリーポッターのダイアゴン横丁のモデルになった場所で、わずかな時間しかいれなかったが、ハリーポッターの世界に入ったような感じがした。長距離を走ったせいか、次の日は筋肉痛だった。

ヨークの学生とはたくさん交流をした。彼らは、私が英語を話すときに言葉に詰まっても、最後までしっかり耳を傾けてくれたため、とても話しやすかった。東京科学大学に留学が決まっているヨーク学生もいたため、彼とは日本で再会したときに、美味しいラーメン屋に連れていくことを約束した。

ここに紹介したのはほんの一部であるが、二週間弱というわずかな期間でたくさんの貴重な経験を積むことができた。今度はより長期の留学にもチャレンジしたい。最後に、引率していただいた小林先生、菊地さんをはじめ本プログラムに関わっていただいた教職員の方々に感謝申し上げます。

生命理工学院/生命理工学系/B2

私は今回の超短期派遣プログラムを通して多くのことを学べた。まず、私はこれまで海外経験がなかったため、目に映るものの全てが新鮮だった。街中の古いレンガ造りの建築物や、入り組んだ交差点や、いたるところにあるパブなど日本との違いにとっても衝撃を受けた。また、文化の違いにも衝撃を受けた。まず、日本よりも多様性が富んでいるという点である。人種に関しても多様であり、ヨーク大学の理系学部 of 男女比も日本の大学に比べると男女均等に近く、驚いた。苦勞したことといえば、食文化の違いである。渡航前はイギリスの食事はおいしくないと思っていたが、実際はそんなにまずくはないし、おいしい料理も多かった。しかし、朝食はどこも同じような種類しかなかったり、野菜がポテトくらいしかないため、野菜をあまり食べられなかったりなど食に対するストレスを少し感じた。これもよい意味で文化の違いを感じることができて、勉強になった。

今回の留学で最も痛感したことは自身のコミュニケーション能力の低さである。まず、英語力が低いことだ。受験英語を通して教科書のような英文は読めて聴くことはできるが、日常会話は聞き取りづらく、ましてやイギリス英語は普段から聴いていたアメリカ英語とは発音が異なるため、余計聞き取りにくかった。また、積極性が低かったこともよくなかった点の1つである。学生との交流やメンターとの日常会話ではつい聞き手になってしまい、リアクションを取るだけであまり話そうとしなかった。また、自分から質問したり、話題を振らなかったと思う。講義や研究室案内の最後の質疑応答のときも何人かは積極的に質問していたが、私は消極的になってしまっ て1回しか発言できなかった。消極的なままではいつまでたっても上達しないなと痛感した。

今回の留学は語学だけでなく、文化の違いや人との接し方、話し方など様々なことを学んだ。このことを糧にして、これからの学生生活、さらにその先まで豊かにしていきたい。



ヨーク大学での餌やり

環境・社会理工学院/融合理工学系/B2

資本主義の発祥地であり、重商主義が誕生され、最初に他国から何かを取り入れるようとした国が今、その商業、産業、並びに社会がどんな感じになっているかが気になり、今回のイギリスへのプログラムに参加した。大阪大学日本語日本文化教育センターで勉強する半年の経験を持ち、ヨーロッパ、東南アジアからの人々とのお付き合いに慣れ、好きになった。ある私を教えた先生が、アメリカやスウェーデンのほうが似合うと言われることがあるが、今度は世界をリードする学府の雰囲気味わいたいために、インペリアル・カレッジ・ロンドンを狙って、イギリスを選んだ。感想は、はるかに予想を超えて大ヒットだった。保守的で、考えが硬いのではないかと思ったが、真逆で、学生たちはあらゆる場で活躍して、社交的でもあり、創造的でもある。校内には至る場所にコンテストや大会のポスターが貼られ、そのために学生が集まって没頭するところが多い。学生交流も本当に積極的に行っている。例えば今回私たちが発表を行った次の日、その次の日も、学生パブで交流を行うと誘われた。自分の研究、周囲の環境、お互いへの尊重、どんな場面でも協力し合う。あのようなインペリアル・カレッジ・ロンドンにいたからこそ、全てが大好きになれるし、自分の全てをそこに捧げられると思えるのではないかな。もしそこにいることができれば、きっと卒業の後にも、いい思い出ばかりであんまり後悔することは少ないのでしょう。だからインペリアル・カレッジ・ロンドン、それからそれと似たようなヨーク大学にいたことが私の一番の思い出となっている。将来必ずまたあのような学府に留学することで、気が合う人に再度出会い、悔いのない勉強と研究の日々に力を注ぎたいと思う。

私を動かせるのは、自分に、自分の身の回りに満足できるか、誇れるかどうかなのだ。イギリスの街並みを見ると、外観は中世から残ったままのものが多く、実際綺麗であるし、イギリス人もその歴史に誇りを感じているのであろうと思った。今回交換中に会ったイギリス人はみんな熱意を持つ者で、互いに知り合ったことに喜んで見ればよかった。その会話の環境で、私は大胆に英語を話せて、喋りたいことは次々頭の中に湧いて、時々考えずに英語の対話ができてしまった。今までの私を見ると不思議な体験だった。相手なら聞いてくれるのだろう、安心してゆっくりと喋っていいのだろう、こう思えたからこそできたと思う。私はずっと英語を上手く使えないことに苦悩したが、今回で英語が好きになったかもしれない。

私自身も東京科学大学への留学生であることもあって、日本人学生との人間関係を上手く処理することが苦手だったかもしれない。時々ルールに縛られない日本人学生がいて、私とすごく仲良くなれた人もいるけど、今回のメンバー達もまたいろいろ許してくれて、カバーしてくれて、時々悩むことも共有してくれる優しい人たちだった。おかげですごく充実した毎日を過ごせた。将来ふりかえって見ると絶対良い思い出になると確信している。最後の最後、ただただメンバーさん達に、引率の郁夫先生と菊地さんに、本当にありがとうと伝えたい。



初日にみんなで行ったパブの様子



メンターと鴨の餌やりをした



みんなで行ったミュージカル、レ・ミゼラブルで撮った写真、俳優さんからの挨拶を受けた

工学院/電気電子系/B2

私は大学生活の中で長期留学に挑戦したいと考えている。その第一歩として、今回イギリスで実施された超短期海外派遣プログラム(UK)に参加した。本プログラムでは、異文化に触れ、英語を使って積極的に行動することを目的としていた。出発前に立てた自身の目標の一つは、「恥ずかしがらずに積極的に話すこと」であった。これは事前学習の際、教員からも指摘された自身の課題であり、特に意識して取り組むつもりであった。

しかし、実際に現地で生活してみると、その目標に十分取り組むことはできなかった。例えば、お店で注文に困った際、自分で話すことを避け、英語が得意な友人に代わりに対応してもらってしまった。また、現地の学生による発表を聞いた際には、リスニング力の不足を痛感し、内容を十分に理解することができなかった。スピーキングにおいても、自分の声が小さくて聞き取ってもらえなかったとき、それ以上伝えようと粘ることができず、近くの友人に助けを求めてしまった。

このような経験から、長期留学を実現するためには、自分にはまだ多くの課題があると実感した。特に、英語力と積極性の両面での成長が必要である。また、語学力が一定の水準に達していないと、学問面においても十分な学びを得ることが難しいという現実にも直面した。実際に、専門外の研究発表を聞く中で新鮮な刺激を受けたが、それを深く理解できるだけの語学力が不足していると感じた。

一方で、本プログラムでは自分の興味の幅を広げることができ、どのような分野に関心があるのかを再認識する機会となった。加えて、イギリスの街並みや文化に直接触れたことで、異文化の魅力を実感することができた。中学時代に参加した海外研修とは異なり、今回は自由時間が多く、自分たちで行動計画を立てる必要があった。その中で、自分が時間に対してルーズであることや、計画を立てる難しさにも気づかされた。今回の経験を通して、自分に不足している点が明確になると同時に、海外で学ぶことの楽しさや刺激も強く感じた。今後の大学生活では、英語を積極的に使用する機会を増やし、自信を持って行動できるよう努力しながら、長期留学という目標に向けて着実に歩んでいきたいと考えている。



餌を頬張るヨーク大学のガチョウ



ウィンブルドンのセンターコート

環境社会理工学院/土木環境工学系/B3

私は以前、超短期の海外派遣プログラムでスリランカに行く機会をいただきましたが、今回訪れたイギリスはスリランカや日本とはまったく異なる独特の雰囲気を持っており、非常に新鮮で魅力的でした。特にロンドンの街並みは、歴史的な建物と現代的な要素が見事に融合しており、街を歩くだけでその魅力を感じることができました。街中では英語だけでなくフランス語やスペイン語、さらにアジア系の言語までさまざまな言語が飛び交っているのを目の当たりにし、その多言語が共存する様子に驚くと同時に、世界中から人々が集まる大都市であることを強く実感しました。

今回の訪問では、複数の大学を見学させていただきました。日本とは異なり、イギリスの大学では、異なる文化的背景を持つ学生たちが共に学び、意見を交わし合っている様子を目の当たりにし、非常に刺激を受け、国際的な環境で学ぶことの意義を改めて実感することができました。どの大学にも共通して、学生が交流できるような広いコミュニティスペースが充実しており、学生同士の会話や自主的な学びを重視していることが伝わってきました。こうした学びの環境に触れることで、学問の深さだけでなく、学びの方法や価値観の違いにも気づき、より幅広い視点を持つことの大切さを再認識しました。また、訪れた大学の研究施設や実験器具の充実度には圧倒されました。設備が非常に整っており、その規模や技術の高さには驚きました。こうした環境で学べるということは、学生にとって大きな強みであり、学問や研究に対する真摯な姿勢を感じました。これらの施設を利用しながら学びを深められることは、留学の魅力そのものであり、改めて留学をしてみたいという気持ちが強くなりました。



図 豊富な実験器具

短期派遣の後半に滞在したヨーク大学では、メンターの方々と英語で積極的にコミュニケーションを取る機会が多くありました。私の拙い英語にもかかわらず、メンターの方々は根気よく理解しようとしてくださり、非常に温かく接していただきました。この経験を通じて、言葉の壁を越えて意思疎通できる喜びと、自分の考えを英語で伝える楽しさを実感することができました。日常的に英語を使う環境で過ごすことの重要性を感じ、さらに英語力を高める必要性を強く意識するようになりました。ヨークはロンドンとはまた違った落ち着いた雰囲気を持つ都市で、静かで自然豊かな環境がとても美しく、街を歩いているだけで心が癒されました。寮での生活も含め、海外で学ぶということの魅力や意義を感じることができました。

今回の経験を通じて、語学学習にもっと力を入れる必要性を強く感じました。特に英語の習得をさらに深め、将来の留学や国際的なキャリアに役立てていきたいと思っています。また、短期間の滞在だけでなく、より長期間の留学にも挑戦してみたいという意欲が湧きました。これからの自分の成長のためには、どのような学びを深め、どんな経験を積んでいくべきかを真剣に考え、自分の未来に向けて一步一步進んでいきたいと感じています。この貴重な経験を今後の学びや進路決定に活かし、国際的な視野を広げていきたいと思っています。

生命理工学院/生命理工学系/B3

今回私は初めて留学に参加した。漠然と英語圏に行ってみたい、イギリスに行ってみたいという気持ちで申し込んだ。このイギリスのプログラムに参加したことのある友人からおすすめされたのも後押しとなった。

このプログラムではNPLを見学させてもらったり、複数の大学でキャンパスツアーや研究室見学をしてもらったり、PhDの方の研究の発表を聞かせてもらったりと旅行では体験できない有意義な時間を過ごすことができた。ただでさえ英語が苦手な私にとって、専門的な話は英語が全然理解できず焦ったが、それでも聞いていくうちに少しずつ聞き取れることが増えた。生命理工学院の所属の参加者が多かったのもあり、生命に関するお話が多かったので興味深かった。

ヨーク大学では、メンターさんや東京科学大学に留学を予定してる現地の学生と交流した。メンターさんと話すのは、英語力にかなり不安があったので緊張したが、とても優しくしていただいたので楽しい時間が過ごせた。メンターさんは鳥があまり好きじゃないのに餌やりをさせてくれた。また、自分の留学の経験を楽しそうに話してくれたのが印象的だった。

イギリスに行くと日本との違いをたくさん感じた。ヨーク大学のキャンパスやロンドンの公園に、白鳥をはじめたくさんの鳥たちやリスなどがいることにとても驚いた。他にも大学内にパブがあったり、ジャズバーでライブをやっていたりと日本にはない文化があった。また、イギリスではバスに乗るときにはHello.、降りるときにはThank you. と笑顔で挨拶していたり、スーパーで店員さんが話しかけてくれたりと温かい人が多く、こちらでも自然と笑顔になることが多かった。

今回の超短期留学は、たった10日ほどではあったがとても貴重な経験となった。積極的に話すことも英語も苦手だったが、現地で話したメンターさんや街の人たちが私の拙い英語を急かさず聞き取ろうとしてくれたり、コミュニケーションをとってくれたりしたことで英語を話すことへの恐怖はかなり減った。一方で、研究室のツアーなどの際に理解が追いつかなくて質問が思い浮かばず、なかなか発言できなかったことが悔しかった。また、今回見学した大学で留学生が6割もいると聞いて驚いた。自分の周りでは長期留学する人はかなり少数派だが、世界的に見たら案外そんなことないのかもと思い、自分も長期留学に挑戦してみたいと思った。そのために英語の勉強を続けていきたい。今回の体験をこれからの英語学習の糧にしたいと思う。

最後に、引率してくださった郁夫先生、菊地さん、一緒にプログラムに参加したメンバー、お世話になったすべての方々に感謝を申し上げます。



ヨーク大学での朝食。5品までなのを知らずに取りすぎて普通に怒られた。



公園にいたリス

工学院/情報通信系/B3

私はもともと留学にはあまり興味が無かったが、親が留学に対して肯定的だったこともあり、1番ハードルの低そうな超短期プログラムくらいは参加してみようかと思ってこのプログラムに応募した。そんな私が、プログラム参加後どこか参加中に長期留学に行きたいと考えて調べ始めるなんて、誰が想像しただろうか。私が1番驚いている。

この12日間はとても濃く、非常に充実していた。イギリスの人々はなんとなく冷たいようなイメージを持っていたが、実際はとても気さくで優しい人ばかりだった。そして、様々なことに対してオープンで自由に生きているという印象を受けた。

イギリスの街並みの美しさや食事における野菜の少なさなど、イギリス特有の経験もちろん面白かったが、イギリスや特定の訪問施設が良かったというよりは、関わった人たちが皆温かかったことが何より素晴らしかった。

関わった人たちとは、イギリスで出会った人だけではない。普段は同じ系の人や同じサークルの人、すなわち専攻や嗜好が似通っている人ばかりと交流することが多いが、このプログラムの参加学生は学年、専攻、所属サークルが多種多様で、ただ今までと同じ大学生活を送っているだけでは出会わない人たちだった。留学が始まる前はあまりお互いのことを知らなかったが、12日間も一緒に行動しているとそれぞれの人柄が分かってきて、留学が終わる頃には全員と仲良く話せるようになっていた。

そして引率のお2人は、私が想像していたよりも何倍も学生のことを考えてくださっていた。私たちがこのプログラムを存分に楽しみ、無事に帰ってくることができたのは、お2人のおかげである。お2人も含め、この16人でプログラムを無事に終えることができたことが本当に嬉しく、心から感謝している。

私が留学に対してそこまで興味を持っていなかった大きな理由は、留学によって得られるメリットがあまり具体的にイメージできなかったことである。実際、グロ理シンポジウム等で留学経験者の方々の話を聞いていると、「視野が広がった」「多様な価値観に触れることができた」「自分を見つめ直すきっかけになった」というようなメリットを挙げる人が多かったように思う。そして私も、留学で何を得られたのかと聞かれたら、そのような抽象的なことしか答えられない。留学によって得られるものはきっと十人十色で、人によっては「ふーん、こんなもんか」程度の感想で終わるかもしれない。しかしその一方で、私のように価値観や今後の人生計画まで変わる人もいる。私は今まで自分が凝り固まった考えで生きていたということ、息苦しかったのだということに初めて気づき、今までは考えもしなかった「日本以外の国で暮らす」という選択肢が頭の中に出現した。様々な人に会うこと、様々な経験をすることが何故大切なのかを身を持って理解することができた。

もっと早く参加していれば今後の長期留学の計画をもっと柔軟に立てられたかもしれないと思う一方で、今回参加したからこそ今回のメンバーと会えたのだから良かったとも思う。イギリスで出会った人々も含め、今後も交流を続けていけたら良いなと考えている。そしてもっと長期の留学に行きたいし、留学だけでなく、様々なことにチャレンジしていきたい。



ヨーク大学での夕日



癒しの鳥たち

物質理工学院/応用化学系/B3

私自身、かねてからイギリスへ行ってみたいという願いがあったので、それをこのプログラムで叶えることができて大変よかったと思っている。

私がイギリスに興味を持ち始めたきっかけは、イギリス英語に惹かれたからだ。現地では、今まで「イギリス英語はこういうもの」と聞いていたこと（単語や発音など）を自分の目や耳で確認することができ、とても面白かった。また、学生や店員さんなど、多くの人の綺麗な英語を聞くことができ、イギリス英語にますます惹かれたと同時に、英語学習に対するモチベーションが上がった。

正直、渡航前は、英語力の向上はそこまで期待していなかった。今回のプログラムは期間も短く、行動を共にする学生や先生とも日本語で会話するためだ。しかし、実際に渡航するにあたり、できるだけ現地の人と会話するよう心がけ、訪問先の人やお店の人などにも積極的に話しかけた。それによって、実践的な英語力が磨けたと感じている。今まで経験した日本での英会話とは違い、日常の些細なことも英語で話すため、初めは何とも言えないのかわからず戸惑ったが、すぐに慣れることができた。また、私は英語を話す際に、

単語や文法を考えすぎてしまい、なかなか英語が出てこないという欠点がある。しかし今回のプログラムでは、自分で思っていたよりも、単語や文法よりも内容を伝えることを重視できた。自分なりに意識したものもあるが、周りが英語でどんどん会話しているのを見て、「自分も会話に参加したい」という思いから自然とそうようにできたのだと思う。このプログラムを通して、英語圏の国で生活することがいかに英語力の向上に役立つかを実感することができた。

さらに、ヨーク大学でメンターさんと化学の講義を受ける機会があった。今後より長期の留学をする予定があり、そこでは英語で講義を受けるため、海外の大学での講義の雰囲気を感じることができたのは大変ありがたかった。

私は紅茶が苦手でお酒も飲まないため、紅茶やパブの文化で知られているイギリスで楽しく過ごせるか少し心配していた。しかし、紅茶が苦手な現地の人とも出会い、パブではお酒を飲まなくても大丈夫だった。また、イギリスは料理が美味しくないということでは有名だが、美味しい料理やスイーツもたくさんあった。さらに、イギリスは基本的にいつも雨で、冬はとても寒いと聞いていたが、今回のプログラム中はほとんど快晴で暖かく、大変過ごしやすかった。





渡航中の空模様

(上) ウィンザー城 (下) ヨーク大学

現地では、思っていた以上に自由時間があつた。ロンドン市内の観光名所を巡ったり、オックスフォードを散策したりすることもでき、メンバーとの仲が深まったと思う。まだまだ行きたいところはたくさんあるので、いずれまたイギリスを訪れたい。そして今度は、イングランドだけではなくウェールズやスコットランド、北アイルランドにも行ってみたい。





オックスフォード

(上) クライスト・チャーチ (下) Alice's Shop

グループ内では、交流企画係を務めさせてもらい、私はヨーク大学での交流企画を担当した。その中で、メンターさんとグループに分かれてあやとりをしてもらうことを計画しており、初めに私が皆の前でほうきの作り方を示すつもりだった。しかし、練習したにも関わらず、ほうきの作り方が途中から思い出せなくなってしまった。焦ったが、思い出せないものは仕方ないので、取り敢えずグループに分かれてあやとりをしてもらうことにした。私は「やらかしてしまった」と落ち込んだが、私が手間取っている間に、あやとりに慣れないヨーク大のメンターさんと科学大生との間でコミュニケーションが取れていたようだった。結果的に、メンターさんとの距離を縮めることができた。皆が楽しそうに交流しているのを見ることができて、とても嬉しかったし、あれこれ考えて準備して良かったと思っている。



ヨーク大学での交流企画の様子

プログラムの初めの方は、家や日本食が恋しくなっていたが、すぐに日が経ち、終わりが近づくにつれもっとイギリスにいたいと思うようになっていた。それほど充実した毎日を過ごすことができ、今回の経験を今後の海外生活にも活かすことができると信じている。

今回イギリスでこのような素晴らしい経験ができたのは、支えてくださった方々のおかげである。一緒にプログラムに参加したメンバー、引率してくださった小林先生と菊地さん、そして関わる全ての方々に心から感謝している。

情報理工学院/情報工学系/B4

今回のイギリス超短期派遣プログラムでは、NPL (National Physical Laboratory)、インペリアル・カレッジ・ロンドン、ロンドン大学、ヨーク大学といった研究機関や大学を訪問し、専門的な研究の解説を受けたり、研究室の見学を行ったりすることで、分野を超えた多様な研究内容に触れることができた。特に、ヨーク大学では数日間滞在し、現地の大学生の生活を体験することで、日本の大学との違いを実感する貴重な機会となった。

また、現地の大学生と交流することで、コミュニケーション能力を向上させるとともに、異文化理解を深めることができた。さらに、ロンドンやヨークの歴史的建造物を訪れ、事前学習で得た知識と実際の風景を照らし合わせることで、イギリスの歴史に対する興味がより一層深まった。

この派遣を通じて、将来的に長期の海外留学への意欲が高まるとともに、専門的な英語の理解力を向上させる必要性を強く感じた。今後は、英語の学習にさらに力を入れ、より深い専門知識を身につけていきたい。



NPL(National Physical Laboratory)の Bushy House での
研究発表会。



イギリスの君主の公邸の一つであるウィンザー城への訪問。



シャーロック・ホームズ博物館の見学。シャーロックホームズの作品が再現された部屋に加えて、シャーロックホームズに関連する映画やアニメーション作品などについて説明されていた。



ヨーク大学で、グループに分かれてメンターと交流をした。それぞれの文化や言語について相互に知ることができた。

参考文献

- [1]<https://tfl.gov.uk/modes/tube/>
- [2]<https://englishbreakfastsociety.com/english-breakfast-recipe.html>
- [3]英国(グレートブリテン及び北アイルランド連合王国)基礎データ | 外務省
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/uk/data.html>
- [4]日本の領土データ | 外務省
https://www.mofa.go.jp/mofaj/territory/page1w_000011.html
- [5]統計局ホームページ/人口推計
<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/index.html>
- [6]【イギリス総選挙 2024】 労働党が単独過半数、14 年ぶり政権交代 保守党は現職閣僚や元首相ら落選-BBC ニュース
<https://www.bbc.com/japanese/articles/cn4vq965q1eo>
- [7]イギリスの新国王はチャールズ 3 世-BBC ニュース
<https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-62844110>
- [8]主要経済指標
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100405131.pdf>
- [9]天気と季節 | イギリス留学 | ブリティッシュ・カウンシル
<https://www.britishcouncil.jp/studyuk/living/weather>
- [10]議事ガイド
<https://www.parliament.uk/globalassets/documents/lords-information-office/brief-guides/hoflbgjapanese.pdf>
- [11]大憲章／マグナ＝カルタ
https://www.y-history.net/appendix/wh0603_2-007.html
- [12]イギリス、欧州連合を離脱 47 年間の関係に終止符-BBC ニュース
<https://www.bbc.com/japanese/51335858>
- [13]【検証】 イギリスの EU 離脱から 5 年、影響を受けた 5 分野を分析-BBC ニュース
<https://www.bbc.com/japanese/articles/c9qjepv3x2po>
- [14]W トムソンはどんな人？わかりやすく解説 Weblio 辞書
<https://www.weblio.jp/content/Wトムソン>
- [15]チャーチル
<https://www.y-history.net/appendix/wh1505-034.html>
- [16] 英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国） - 外務省
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/uk/data.html>
- [17] London – Britannica
<https://www.britannica.com/place/London>
- [18] 英国～歴史と伝統が未来と出会う国 - 海外ウォッチャー
https://www.mof.go.jp/public_relations/finance/202301/202301m.pdf

- [19] 多民族の首都 ロンドン – ナレッジキャピタル
https://kc-i.jp/activity/kwn/gianfranco_b/20201006/
- [20] Top Languages Spoken In London – Milestone Localization
<https://www.milestoneloc.com/languages-spoken-in-london/>
- [21] Religion, England and Wales: Census 2021 – Office for National Statistics
<https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/culturalidentity/religion/bulletins/religionenglandandwales/census2021>
- [22] ロンドン – 世界史の窓
<https://www.y-history.net/appendix/wh0103-079.html>
- [23] ロンドン塔 – 阪急交通社
<https://www.hankyu-travel.com/heritage/uk/london.php>
- [24] ロンドン大会 – JOC 日本オリンピック委員会
<https://www.joc.or.jp/olympism/inheritance/fairplay/london.html>
- [25] イギリスの有名人 – UK info
<http://www.ukinfo.jp/culture/people3.php>
- [26] City of York Council - Living in York
<https://www.york.gov.uk/downloads/file/463/statement-of-licensing-policy-2022-to-2027>
- [27] City of York Council - Information about 2021 Census
<https://www.york.gov.uk/statistics-information/census/2>
- [28] TEKIBO – 高校政治経済「イギリスの政治体制のしくみ」
<https://tekibo.net/igirisuseiji/>
- [29] Google Maps - York
https://maps.app.goo.gl/xtgVWTomBEqTqo5t7?g_st=com.google.maps.preview.copy
- [30] Britannica – York
<https://www.britannica.com/place/York-England>
- [31] Visit York – History of York
<https://visityork.org/history-of-york>
- [32] City of York Council – History
<https://her.york.gov.uk/city-walls-history>
- [33] Annex A – York
<https://democracy.york.gov.uk/documents/s13250/Annex%20A%20Sustainable%20Community%20Strategy.pdf>
- [34] 旅行のとも、ZenTech – ヨーク地図
<https://www.travel-zentech.jp/world/map/british/Map-York-Link.htm>
- [35] City of York Council - Council Plan 2023–2027
<https://www.york.gov.uk/council-plan-1/one-city-2023-2027/7#:~:text=,industry%20and%20employment%20size%20band>

- [36] City of York Council - York Economic Strategy 2022–2032
<https://democracy.york.gov.uk/documents/s106043/Annex%203%20An%20Overview%20of%20Yorks%20Economy.pdf>
- [37] City of York Council - York World Heritage City
<https://www.york.gov.uk/WorldHeritage#:~:text=York%20is%20the%20pre,c71%20CE%20by%20the%20Romans>
- [38] York Minster
<https://yorkminster.org/>
- [39] National Railway Museum
<https://www.railwaymuseum.org.uk/>
- [40] NPL-概要
<https://www.npl.co.uk/>
- [41] NPL-Biometrology
<https://www.npl.co.uk/biometrology>
- [42] インペリアル・カレッジ・ロンドンの概要
[Imperial College London](https://www.imperial.ac.uk/)
- [43] Queen Mary University of London-our history
<https://www.qmul.ac.uk/about/history/>
- [44] Queen Mary University of London-Faculties, schools and departments
<https://www.qmul.ac.uk/about/whoswho/departments/>
- [45] Queen Mary University of London-Facts and figures
<https://www.qmul.ac.uk/about/facts-and-figures/>
- [46] Queen Mary University of London-The Octagon
<https://www.qmul.ac.uk/about/queen-mary-heritage/queen-mary-and-westfield/queen-mary-college/queen-mary-college-tour/the-octagon/>
- [47] Times Higher Education World University Rankings 2025
<https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/latest/world-ranking>
- [48] About the University -University of York
<https://www.york.ac.uk/about/>
- [49] 2019 年 8 月時点のマーケットシェア
<https://www.express.co.uk/life-style/life/1344243/tesco-asda-marks-and-spencer-morrisons-waitrose-delivery-rules-online-groceries-uk>
- [50] World Breakfast -世界の朝ごはん-
<https://www.marumitsu.jp/worldbreakfast>
- [51] DREAMBEER 「イギリスの国民食『フィッシュアンドチップス』を極める」
<https://dreambeer.jp/blog/paring/20220106>
- [52] 料理王国 「サンデーローストは英国の日曜になくてはならないご馳走」

<https://cuisine-kingdom.com/laundry>

[53]Chimney Pot

<https://earlscourt.sakura.ne.jp/chimney.html>